このたびの阪神大震災により被害を受けられた皆様に心からお見舞い申し上げます。
また、一日も早い復旧をお祈り申し上げます。

財団法人　日本ハンドボール協会

被災者救援のために日本ハンドボール協会は義援金として100万円を寄贈しました。

## 緒方嗣雄氏が第44回日本スポーツ賞受賞

去る1月23日、読売新聞社制定の第44回日本スポーツ賞が前全日本女子チーム監督の緒方嗣雄氏に授与されました。ハンドボール界からは7人目の受賞となります。

同氏は1969年日本体育大学を卒業、湧永製薬を経て1979年大和銀行監督に就任、第42回国体優勝をはじめとする数々の輝かしい実績を提げて1989年全日本女子チーム監督に就任、1991年に広島で開催された第3回女子アジア選手権大会第2位、そして昨年のアジア大会でも2位の座を確保すると同時に9年振りに世界選手権大会への出場権を確保されました。

この実績と、それぞれの大会の前には5ケ月以上の合宿を行うなど、全てを全日本女子チームの強化に捧げられた情熱と努力が高く評価され今回の受賞となりました。

# 女子ナショナルチーム監督に 樫塚正一氏が就任

前監督の緒方嗣雄氏辞任の後を受け樫塚正一氏が1月14日付で女子ナショナルチーム監督に就任することが決定した。同氏の監督就任は1988年に次いで2度目となる。

樫塚新監督は香川県出身。1968年日本体育大学卒。1972年より武庫川女子大学勤務。1982年には文部省海外派遣でドイツで1年間の研修を積まれた。また、武庫川女子大学のハンドボール部監督を勤める傍ら1989年まで女子ナショナルチームのコーチとしてもご活躍を戴いた。

なお、コーチングスタッフについては後日発表の予定。

## 女子ナショナルチーム 監督として抱く抱負

全日本女子ハンドボールチーム監督　樫塚　正一

アジア大会を終えるまでのスタッフと選手の重ねた多くの努力は、忘れてはならないイベントでした。

新しい代表チームが目標に向かって活動する為の課題は多い。多くある課題の中で、最も優先すべき事柄は、目標とするチームの決定と、対戦するチームに対する戦術の決定だと考えます。攻撃と防御の戦術を定めて、戦術に必要な能力を持っているコーチの人選、次いで戦術に力を発揮出来る選手の選考が大きい課題と思う。また代表チームが目標に向かって躍進する為に必要な内容とは、技術的課題と精神的課題を過去の対戦から洗い出して、今後の練習目標と選手の能力の配分を考察し、活動カレンダーの作成が大切と考えた。その上に私自身がチームを作る時に得意とする分野を加えて、チーム力に厚みを持つことだと思います。多くの課題を持つ中でやり抜くことは大変なことだと思うが、多くの人の援助が戴ける様、最善を尽くさなければならないことが私の役割であり、任務だと認識しております。

# 日本協会だより

## 男女ナショナルスタッフ・常務理事打ち合わせ会

日　時　平成7年1月13日(金)18時
　　　　~20時
場　所　東京体育館第四研修室
出席者　中澤専務理事、常務理事
　　　　8名

アトランタオリンピック、熊本世界選手権へ向けての強化方針及びそれに伴う予算について意見の交換を行った。

具体的な行動計画、予算については本日の討論を踏まえ、今後の常務理事会で具体的に検討して行くこととした。

## 12月度常務理事会

日　時　平成7年1月14日(土)10時
　　　　~15時40分
場　所　岸記念体育館401会議
　　　　室
出席者　中澤専務理事、常務理事
　　　　8名

《議題》

一、男子世界選手権アジア地区第3位決定戦について

年末にフランスで開催されたサウジアラビアとの試合に快勝、第14回世界選手権大会への出場が決定した旨報告あり。ここに至るまでの関係各位の協力に対し、深甚なる感謝の意が表された。

二、ジャパンカップ開催について

今年度ジャパンカップの準備状況について報告。開催予定地については神奈川、広島、熊本。来日チームはドイツ・グンメルスバッハ、ハンガリー・ベスプレム、オーストラリア・シャラックウィーンが検討されている旨報告あり。

三、全日本総合選手権出場枠について

出場数は現状通り男子16、女子14チームとすることに決定。男子内訳は、日本リーグ1部8、2部リーグ2、実連1、教職員1、学生3、クラブ1。女子は日本リーグ1部8、2部1、実連1、教職員1、学生2、クラブ1とする。以上を全国理事会に提案することとした。

四、97世界選手権準備に関する活動予定について

世界選手権大会の支援体制作りの一環としてオーナー会議の下部機構として設けられる運営、広報、強化3グループの活動を推進するための会議を2月3日に開催することとし、そのための準備に万全を期すこととした。

五、平成7年度登録について

登録区分の名称の一部変更、個人登録金は当面学生までとするなどについて次回全国理事会に再提案。その趣旨について各都道府県協会、各連盟に十分徹底をはかり協力を求めることとした。従来の一般Bの登録状況は実態と著しく異なる模様。これを正確に把握するために登録金改定を含めた対策を図ることとした。

六、平成7年度主要行事日程について

ほぼ原案通り承認。全国理事会に提案する。

七、平成7年度部門別事業予算について

強化費を除き、原案通り承認。強化費については前日の話し合いを踏まえて早急に作成、提出することとした。

八、女子ナショナルチーム監督、スタッフ選任について

次期女子ナショナルチーム監督候補の樫原正一氏について勤務先の了解が得られたので1月14日付で監督として選任する旨報告あり。なお、スタッフについては検討中につき、後日、常務理事会に提案、検討することとした。

## 3月度行事予定

●大会

| 3/24～28 | 平成6年度全国高校選抜大会 | 徳山市 |
|---|---|---|

●ナショナル活動

男子

| 3/9 ～17 | 強化合宿 | 熊本(オムロン) |
|---|---|---|
| 3/28～4/5 | 強化合宿 | 埼玉(大崎電気) |

女子

| 3/14～6 | 強化合宿未定 | 未定 |
|---|---|---|
| 3/20～30 | オリンピックアジア予選直前合宿 | 未定 |

●会議

| 3/18 | 新理事会 | |
|---|---|---|
| 3/14～19 | 平成6年度公認C級コーチ養成講習会 | 東京 |
| 3/18～19 | レフェリーシンポジウム | 東京 |

## CONTENTS


緒方嗣雄氏が第44回日本スポーツ賞受賞…………1
女子ナショナルチーム監督に樫塚正一氏が就任…………2
監督として抱く抱負…………樫塚正一…………2
日本協会だより…………3
平成6年度の強化行事の総括…………井　薫…………4
世界選手権大会組織委員会ニュース…………井　薫…………5
日本リーグ・プレーオフ…………6
第2回オーナー会議報告…………8
公認C級コーチ養成講習会について…………村松　誠…………10
スポーツと広報の意義・役割…………木野　実…………12
ハンドボールと指導法〈最終回〉…………大西武三…………14
全国高校総体出場校の活動と実態に関する調査研究…………佐藤　功…………15
フリースロー時のゴールキーパーの視線…………22
ハンドボール競技における外傷・障害に関する調査報告①…………関西学連…………24
国際情報…………26
フリースロー「ドーピング・ショック」…………早川文司…………28
各地の大会結果…………29


[表紙]日本リーグ・プレーオフで活躍した西村英士(中村荷役)選手

# 平成6年度の強化行事の総括

## 男女揃ってアジア大会銀メダル、世界選手権出場権獲得

強化委員長 井 薫

2月5日、東京駒沢体育館での日本リーグ・プレーオフ男子決勝の前に、平成6年度の男女全日本チームのスタッフと選手が、アジア大会での揃っての銀メダル、さらにそれぞれに世界選手権大会への出場権獲得を評価され日本協会より表彰を受けた。

本年度、男女全日本チームはアジア大会の入賞と、世界選手権大会の出場権獲得の二つを目標に、特にアジア大会に関しては男子は金、女子は銀と設定した。

10月の大会終了までを強化にあてたい現場の希望を、実業団連盟、日本リーグ運営委員会をはじめ関係の皆様方のご理解とご協力で実現いただいた。

プレーオフで表彰された男女全日本チーム

年度末にあたり、年間の強化行事にそって総括したい。

まず3月、広島でのチャレンジマッチ、全日本の戦力の打診には格好の企画、男子には日本リーグ選抜、世界学生候補、全日本B・ジュニアが挑戦、圧倒されたが世界学生候補には大苦戦。課題を多く残した。

女子は学生選抜相手の2ゲーム。ともに点差はついたが学生側に故障欠場があり、ベストで対戦すれば双方メリットありを予感。今後の方向性を得た。

全日本女子は大会終了後、175日間の長期合宿に入りアジア大会に向けスタートした。5月5日～8日は第14回男子世界選手権の東アジア地区予選。日本、韓国共に中国を下しての決勝戦。前半2点差で韓国、後半にかけた日本だったが、アタッカーの不発が勝負を分け8点差で敗れた。

個人技に優れた韓国はゲーム運びに安定感があり、それを上回るためにはコンビの徹底と、新鮮な戦術の開発が望まれる展開となった。

予選終了の翌日、男子チームはアジア大会の金メダルを目指し、欧州に向かった。

既にお気付きの通り、広島県協会は10月に向け3～5月と、アジア大会の会場となる「東区スポーツセンター」を全日本の強化に準備いただき感謝したい。

外国チームは7月に女子、8月に男子ともにハンガリーの名門クラブチームが来日。デモンストレーションとしての成果は大きかった。

女子は国際大会終了後、北欧を中心の遠征に旅立った。

10月2日、アジア大会開幕。女子の対中国戦は前半3点のリードを許すも、後半27分同点に追いつき、29分30秒にベテラン比嘉、市来のコンビプレーでゴールイン。逆転勝ちをして金メダルに夢をつないだ。

対韓国戦、若手の活躍で先攻。稀に見る韓国のもたつきの中で15分、7－5とリードしたが、後半は韓国のパワーが炸裂、34－20の14点差で、先のアジア選手権と同じ得点差で打倒韓国は果たせなかったが、銀メダルは評価したい。

男子はクウェートの乱調で、順位争いが混沌とする中での韓国との決勝戦。前半互角、後半勝負の展開は5月の東アジア地区予選と同じ。以後の強化はまさにこの時のためのものであり、5月に不発の中山、岩本が決めて23分に1点差と追い上げたが、肝心の大詰めで粘れず、26－21でゲームセット。目標の金に届かなかった。

アジア大会は結局、男女銀メダルに終ったが、球技種目で男女双方決勝戦に残ったのはハンドボールのみで、蒲生、緒方両監督をはじめ、スタッフ、選手の健闘を讃えたい。同時に関係者の皆様のご激励、ご配慮に感謝したい。

男子はさらに第14回男子世界選手権大会のアジア第二次予選のため、12月20日渡欧。年も押し迫った30日、フランスでサウジアラビアと対戦。31－19の大差で勝ち、本年5月、アイスランドでの大会の出場権を手にした。

女子はアジア大会が世界選手権大会の予選を兼ねていた事もあり、韓国と共に9年ぶりに大会に出場する。

かくして平成6年度は終了するが、チャレンジカップからアジア大会、そして世界選手権大会予選と全国から寄せられた熱い声援と、ナショナルチームを支えていただいた企業各位に、日本協会及び強化委員会として重ねてお礼を申し上げ、総括としたい。

世界選手権組織委員会ニュース

# 実行委員会がスタート！

強化担当常務理事
井　薫

1995年を迎え、熊本はハンドボール世界選手権大会開催の話題一色です。

まず、昨年12月12日、熊本の実行委員会がスタートしました。設立総会には福島知事、三角熊本市長（11月20日の市長選で当選）、八木体育協会会長をはじめ各界のそうそうたるメンバーが出席。招致委員会の解散と今後の活動計画について討議があり、熊本実行委員会、さらに常任委員会、専門委員会を設置。大会の開催と成功にむけての活動の方向付けがなされました。

多岐に亘る部門の活動は、県全体の盛り上げと各方面の支援が不可欠であり、各界リーダーの方々の出席は大変力強く思えました。

そして年末恒例の県内十大ニュースのスポーツ部門は、1999年開催の「熊本国体の内定」を抑えて、「男子世界選手権大会、熊本開催」がトップ。

政治、経済等の一般の部でも7位にランクされ、熊本ではハンドボールはまさにメジャー。この輪を日本全体に広げたいものです。

メジャーの表現が誇張でない理由としては、永年国体の熊本選手団の得点源としての活躍や、11月の県内OG、OBの集いに700名の参加。

そして新年1月15日の日本リーグの熊本県立体育館は、本田技研熊本、オムロンの地元の他に北国銀行対日立栃木の好カードに恵まれましたが、延べ観客は5000人以上。知事、市長も観戦され、県内でしたがTV放映を行いました。

18回を数える日本リーグの熊本大会の観客も、多分国内で断然トップに位置すると思いますし、15日は成人式でしたから、各チームの新成人のプレイヤーに県協会からささやかなプレゼントをして喜ばれました。

年末から年始にかけての熊本のハンドボール事情に誌面をお借りしましたが、世界選手権大会の開催地の雰囲気を、全国の皆様にお伝えするのも大切であると思いますので。

さて、年末にはフランスから第14回男子世界選手権大会の出場権の朗報をお届け出来ましたことは、頑張った全日本チームはもとより、日本協会としても大変嬉しい勝利となりました。

アジア第二次予選の開催日時、場所について、対戦相手国サウジアラビアとの交渉は難航を極め、結局IHF（国際ハンドボール連盟）の調整を受け、年の瀬の押し迫った12月30日、フランス開催となりましたが、この件で日本リーグの開催日程に大変な無理をお願いし、開催予定の各地にも大変なご迷惑をおかけすることになり、日本協会として関係各位にお詫びと、全日本チームへのご協力をお願いした次第です。

全日本メンバーはアジア大会終了後は、それぞれの所属チームに戻って、国体、日本リーグ、全日本総合に出場しましたが、12月30日フランスの決定を受けて、12月11日の全日本総合を終えて集合。合宿を経て21日フランスに向け出発しました（サウジアラビアとの予選の模様は蒲生監督から報告されています）。

全日本のこれからの予定は3月までは国内で合宿、4月10日あたりに渡欧、スイス等で調整の後、アイスランド入りします。

世界選手権大会の開催に伴う準備も、アイスランドの大会の視察が最も大切な学習の場となります。

大会運営全般、宿泊、輸送、式典、VIP対応、メディア、プレス、医事（ドーピング）等々、1997年までに今秋の女子の世界選手権大会や、明年のアトランタオリンピック等の国際大会はあるが、男子世界選手権大会は今回のみですから、万全で臨み充分の成果が待たれるわけです。

以上、今回は熊本の現況、全日本の動向、そして世界選手権大会の準備についてご報告致しました。

# 男子は中村荷役が悲願の初優勝

## 女子は大崎電気が3年ぶりV

第19回日本リーグ・プレーオフが2月3日から5日までの間、東京駒沢体育館において開催された。

初めて導入された女子は、前回屈辱の2部落ちから復活した大崎電気、リーグ3連覇を目指すオムロン、2年連続2位の北国銀行。対する男子は今年度の国体、全日本総合の2大タイトルを獲得の大同特殊鋼、このところ地力アップが目覚ましい中村荷役、前回悲願の初優勝を果たした日新製鋼だった。

8回目の優勝の大崎電気

初優勝の中村荷役

今年度最後のタイトルを獲得するのはどのチームか、興味のつきない争いが行われた。

### 《女子》

### ■オムロン(リーグ2位)対北国銀行(リーグ3位)

レギュラーシーズンは2試合とも1点差という接戦を演じてきたこの対戦。プレーオフの緒戦を飾るにふさわしい好試合が期待された。

オムロンは右45度に内村、センターに田中、左45度に高橋、右サイドに鶴田、ポストに石村、左サイドに古田。ディフェンスには吉田、西村、張が内村、田中、高橋に代わって入り、中央に高い〝壁〟を作って立ちふさぐ。GKは王。

一方、北国銀行は右45度に大林、センターに山崎、左45度に上出、右サイドに松下、ポストに谷本、左サイドに松山。ディフェンスには田中(由)が大林に代わって入る布陣。GKは古澤。

3分、北国の山崎に警告が与えられ、オムロンの内村が7MTを打つがバーに当たる。次いで北国は谷本にオーバーステップ。両チームともまだ硬さが見られる。

先手を取ったのはオムロン。5分過ぎに高橋がセンターからのミドルをブロックをかわしゴールに突き刺す。対する北国も左サイドから松山が決める。この後オムロンは内村、高橋らのミドル、北国は山崎、上出らの速攻が決まり、一進一退の攻防が続く。オムロンはオーバーステップ、パスカットなどのミスが多く、そこを北国得意の速攻で攻められ、ベンチの西窪監督も苦虫をつぶす場面も多い。結局10－9とオムロンリードで前半を終了する。

後半に入ると北国はオムロンの高橋にマンツーをかけて左からのセットを半減させようとする。しかし試合功者のオムロンは逆に足がよく動き、3連取で差をつけようとする。北国は要所で7MTを取られるなどして20分で6点差がつく。粘る北国もオムロンのミスに乗じ、上出の2本の7MTなどで4連取するが、最後はオムロンは張の正面からのカットインや古田の速攻で21－17と逃げ切った。

前半はオムロンのミスをついて速攻につなげた北国だが、逆にオムロンにとってはロングからの失点を押えたのが大きな〝穴〟にならず、後半はその速攻も止められたのが勝ちにつながらなかった。

試合後、西窪監督はリーグ戦で一度は(プレーオフ出場を)危惧していたのでとにかく対北国戦を目標にしてきたとして、対大崎戦に対してはミスに対する注意、パワープレーに対するオフェンス、積極的に攻めること(前半2度のパッシブプレーがあった)をポイントに挙げていた。

### ■大崎電気(リーグ1位)対オムロン

優勝回数が7回の大崎電気と8回のオムロン。いわゆる伝統の一戦で争われることとなったプレーオフ決勝。大崎は朴、白の韓国人コンビを中心にした屈指の攻撃力を誇るならば、オムロンは強力な守備が売り物。

大崎は右45度に朴、センターに広瀬、左45度に白、右サイドに目黒、ポストに本間、左サイドに北村、GKに今野。オムロンは北国戦と同じ陣容。

開始早々大崎、白の正面からのミドルが決まる。オムロンも高橋や西村のシュートが決まり、打ち合いの様子を呈して来た。しかしオムロンにオーバーステップやラインクロスなどのミスが重なり、シュートもゴールを外れ、リズムをつかめない。これに対して白、朴を中心にリーグ一の攻撃力を誇る大崎は開始から飛ばす。19分過ぎにはオムロンは西村、吉田と相次いで退場を出す。この場は1失点にしのいだが、大崎GK今野の好守もあり3～4点差をなかなか縮められない。前半を16－10と思わぬ大差で終了する。

後半は両チームのGKが互いに

好守を見せる。本間の左45度からのカットインで先に点が動いたのは大崎。試合後の大崎・矢内監督の談話にあったように7点差になったことで大崎の攻撃がスムーズになり、本間らのカットイン、サイドからのループシュートが決まり、10分過ぎに9点差はオムロンにとって重くのしかかる。しかし、粘りを見せて9分間で5点差まで追い上げる。だがオムロンの反撃もここまでで、再び大崎の猛攻撃。目黒のサイド、広瀬のカットインなどで31－20。3年振り8回目の大崎の完勝に終わった。

矢内監督はまず選手に感謝し、3年を目安にして優勝を狙えるチーム作りを行ってきたと言う。当初は守って速攻のカラーを作り上げるつもりでいたが、セット主体になった。一度地獄を見た後の優勝だけにほっとした表情であった。

## 《男子》

### ■中村荷役(リーグ2位) 対日新製鋼(リーグ3位)

1週間前のリーグ戦では40－21という大差で中村の完勝に終わったが、日新はベストメンバーでなかったとはいえ、どの程度ショックが払拭されているか。

日新は右45度に木村、センターに林、左45度に西山、右サイドに水谷、ポストに堀田、左サイドに源内、GKに宇田川。ディフェンスは坂口、野中が西山、林に代わって登場。対する中村は右45度に呉、センターに趙、左45度に田口、右サイドに高木、ポストに朴、左サイドに八尾、GKに井上。ディフェンスは斉藤が高木と交代。

中村は呉の速攻で先取。次いで西山がカットインを試みるがゴールを外れる。その後源内のサイドシュートが決まり1－1。すぐさま今リーグでいきなりの得点王になった趙が左45度から外に流れてのミドルが決まると観客が大いに沸く。ところが日新も粘り、木村のカットインや源内のサイドからのループシュートなどで5連取。調子づいた日新は17分に11－5と大きくリード。しかし中村も呉の右45度からのカットイン、趙の速攻が決まると一気にエンジンがかかる。呉が打てば呼応するかのように趙も決め、前半ついに16－16に追いつく。後半はすっかり中村に勢いがつき、途中投入された新人の木浪も積極的にシュートを決める。日新のゴールを守る宇田川もすっかりなす術が無く、結局37－30の乱打戦となり、日新にとっては1週間前の〝借り〟を返すことができなかった。

中村の松本監督は、前半の失点が大きすぎたが、(前半で追いついて) いけるのではと思った。呉、趙の2枚看板＋両サイドを使った攻撃ができたこと、更に木浪がプレーオフに間に合ってよかったと語った。

### ■大同特殊鋼(リーグ1位) 対中村荷役

昨年暮れに行われた全日本総合の決勝と同じカードとなった一戦。総合の借りを返し、念願の優勝を果たしたい中村と三冠を狙いたい大同。どちらも韓国人プレイヤーを持ち、GKは全日本のライバルと見ごたえ十分。

大同は右45度に冨本、センターに末岡、左45度に林（珍）、右サイドに佐藤（光）、ポストに佐藤（壮）、左サイドに藤井、GKに林（康）。ディフェンスには高村、植木が、冨本、藤井とチェンジ。対する中村は右45度に呉、センターに趙、左45度に木浪、右サイドに高木、ポストに朴、左サイドに八尾、GKに井上。

先手を取ったのは中村。八尾のサイドが決まる。次いで趙の左45度からのミドルで2－0。すぐさま（中村戦は緊張すると言っていた）林（珍）の連続シュートで同点。更に大同は末岡の右サイド、中村は朴のポストが決まり、見ごたえ十分の立ち上がりとなった。9分、末岡の7MTを井上が左手でセーブした直後、それに呼応されるかのような趙のセンターからのジャンプシュートが見事に決まる。次いで呉のパスカットからの速攻で5－3。その後は両チームの固い守りがあり、9－8と中村のリードで前半終了。

後半、先に飛び出したのは中村。呉から朴へのポストパスが決まる。次いで趙の連続シュート、八尾のパスカットからの速攻で一気に4連取。ここで離されたくない大同は、佐藤（光）がサイドからのループ。しかし大同にとっては中村の積極的で高いディフェンスに戸惑い、ゴールの枠を外れるシュートが多い。実に14分ものノーゴールとなった。この間中村は、趙や朴の活躍で5連取。しかも大同は3回の退場があり、攻守にリズムを失う。21分に末岡の速攻、林（珍）の連続シュートを決めるが再び中村のダッシュ。呉のサイドからのスーパーショット、朴のスカイプレーなどで中村応援席は大歓声。名手・林（康）に襲いかかった中村の猛攻は止どまるところを知らず実に7連取。大同も最後の抵抗をみせて3連取するが既に焼け石に水。25－14と悲願の初優勝を果たした。

松本監督は「優勝の瞬間は真っ白だった。勝因はディフェンスがよく、GKも当たっていた最高のゲームだった。木浪を入れたことで林（珍）を意識しなくても最強の守りができた」と、前日に次いで木浪の存在を強調していた。

今回、男女とも決勝戦は大差のゲームとなったが、両優勝チームとも高い攻撃力を持つだけでなく、堅い守りがあり、見ている者を飽きさせなかった。攻守一体となったチームだけに賞賛されよう。

尚、最高殊勲選手賞には女子は大崎の白、男子は中村の趙と決定した。

（臼井　鉄久）

※日本リーグの総括記事は次号で詳報の予定。

# 平成6年度 第2回オーナー会議報告

1997年に開催される世界選手権大会を強力に支援し、これを機会に日本ハンドボール界の飛躍を図ろうという趣旨で斎藤会長が提案された日本リーグオーナーによる特別委員会についての第3回目の会議が下記により開催された。

日　時　平成7年2月3日(金)18時〜20時30分

場　所　日本青年館302号

出席者　日本リーグ

大阪ガス、大崎電気、オムロン、三景、三陽商会、ジャスコ、シャトレーゼ、大同特殊鋼、大和銀行、トクヤマ、トヨタ自動車、トヨタ車体、日新製鋼、日本電装、日立製作所、北陸電力、本田技研、本田技研熊本、湧永製薬（五十音順）以上各チームのオーナーまたは代理

日本協会

立石・渡邊両副会長、中澤専務理事、常務理事7名、市原実連理事長

司　会　殿水常務理事（日本リーグ担当）

立石副会長の関西大震災へのお見舞いと並びにアジア大会のお礼と、世界選手権大会は日本ハンドボールのメジャー化に向かっての重要な大会であり、是非ともご協力をお願いしたい旨のご挨拶に続いて議事に入った。最初に専務理事から平成5年11月の第1回オーナー会議より本日に至る間の経過についての報告がなされた。会長直属の支援組織として運営委員会と3つの分科会からなる特別委員会の設置は4月21日の第2回会議で決定したが、その詳細は時間的制約等により十分に議論されないままになったので、各常務理事が手分けして各企業を訪問し理解を得るべく話し合いを行ってきた。その後はアジア大会や世界選手権アジア予選等過密なスケジュールを消化するのに全力をそそがざるを得ず、次の展開が滞ってしまっていた。これを打開し、早急に具体化するために本日の第3回オーナー会議を開催させて頂いた。

組織については3つの分科会代表で運営委員会を構成する。それぞれの長は4月の第2回会議で決定したが、強化担当の湧永儀助氏が急逝されたので後任として草井由博氏（湧永製薬社長）にお願いしたい。尚、前回提案した特別登録金は時期的な問題もあり、今年度の実施は見送り平成7・8・9の3年間の時限を定めて実施したい。その用途は60%を強化費に当て、世界選手権大会出場の日本男子チームの強化を図り、残りを大会運営費の一部として積み立てていく。また、これらを厳正に管理するため日本協会の通常会計と別に特別会計として特別委員会内に財務部と会計の監査機関を設けることにしたいとの提案がなされた。

その後、以上の経過報告、提案について討議がなされた。

特別登録金は日本チームを強くするためと大会を成功させるためにはどうしても必要なものであり、完全に実施するため一層の努力をしていきたい。今回は男子の強化が中心となるのはやむを得ないが、女子にもそれなりの配慮が必要である等のご意見を頂戴したが、ほぼ提案通りご了承戴くことができ、日本協会の事業に大きく前進することとなった。

今回は日本リーグ加盟チームを対象として検討してきたが、今後はリーグに加盟していない実業団チームの他一般企業や一般の有志の方々にもご協力をお願いしていきたい。

広告募集は別途に計画するので、この面でのご協力もお願いしたい。

**特別委員会組織並びに担当表**
**日本ハンドボール協会特別委員会**

運営委員会 ― 財務部

世界選手権推進　企画・広報　選手強化　｜　監事

**運営委員会**　（　）は日本協会担当

| | |
|---|---|
| 委員長 | 米倉　功副会長・(専務理事)・(総務担当理事) |
| 世界選手権推進担当 | 渡邊　佳英副会長・中村荷役・トヨタ自動車・(審判担当理事)・(国際担当理事)・(財務担当理事) |
| 企画・広報担当 | 立石　孝雄副会長・大和銀行・三陽商会・(広報担当理事)・(企画担当理事)・(機関誌担当理事) |
| 選手強化担当 | 草井　由博(湧永製薬)・日新製鋼・大同特殊鋼・本田技研・(強化担当理事)・(普及担当理事)・(指導担当理事)・(実連理事長) |
| **財務部** | 渡邊　佳英副会長・弘田　昇(日新製鋼)・(財務担当理事)・(リーグ担当理事) |
| **監事** | (未定)・米倉　恒洋(北国銀行) |

**分科会**

日本リーグ各オーナー担当

| | |
|---|---|
| ・選手強化 | 湧永製薬・日新製鋼・大同特殊鋼・本田技研・北陸電力・日立栃木・シャトレーゼ・ムネカタ・イズミ |
| ・世界選手権推進 | 大崎電気・中村荷役・大阪ガス・トヨタ自動車・本田技研熊本・北国銀行・豊田自動織機 |
| ・広報(企画) | オムロン・トヨタ車体・三景・日本電装・トクヤマ・三陽商会・ジャスコ・ブラザー工業・大和銀行・ソニー国分・JUKI |

（敬称略）

# 公認C級コーチ
# 養成講習会について

指導委員会　村松　誠

来る平成7年3月14日(火)より19日(日)まで、平成6年度の日本体育協会ならびに(財)日本ハンドボール協会公認C級コーチ養成の専門教科講習会が行われます。今回は、コーチ制度とC級養成専門教科講習会について報告いたします。

## 公認コーチ制度のあゆみについて

現在の公認コーチ制度は東京オリンピックを契機に選手強化事業のコーチ制度として始められました。昭和40年にはトレーナー制度が作られ、このトレーナー資格はハンドボール界においても現中澤専務理事をはじめ、著名な指導者の方々が名を連ねております。その後、各競技の特性を考慮し、上級コーチ、コーチ制度となりました。ハンドボール競技においても昭和53年に上級コーチ講習会が開催され、その後コーチ養成が4回行われております。昭和61年には、保健体育審議会より「社会体育指導者の資格付与制度に付いて」の建議が出され、新しい「公認スポーツ指導者制度」が制定されました。

平成元年にハンドボール協会でも文部省よりコーチ養成の事業認定を受け、文部省認定の競技力向上指導者A、B、C級コーチ養成講習会となりました。この公認コーチ制度の趣旨は「スポーツ指導者の資質と指導力の向上をはかり、指導活動の促進と指導体制を確立するため」となっており、今回開催のC級コーチの役割として「競技別スポーツ技術についての基礎的、専門的指導と活動組織の育成指導等にあたる者」となっております。新資格の施行により、旧資格より、新資格への移行措置も行われ、旧資格者は実績等により新資格への移行手続きをいたしました。

現在、ハンドボール競技にはA級コーチ14名、B級コーチ70名、C級コーチ77名、合計161名の方々がおられます。ハンドボール協会では、C級コーチ養成講習会を平成2、4年に開催し、今回が3回目の開催となります。今後、指導委員会では隔年に養成講習会を開催する予定でおりますが、C級コーチだけでなく、B級コーチ養成講習会の実施を開催したいと考えております。

## 資格の活用について

従来、資格を取得してのメリットがないとのご意見が多くありました。日本体育協会では、将来的には国体の監督・コーチには資格の義務付けを打ち出しておりますが、いまだ具体的にはなっておりません。しかし、サッカーではJリーグをはじめ、チームには有資格の監督・コーチがいなければならないことになっておりますし、ヨーロッパにおいても監督・コーチは一定の基準を満たす資格を持たなければなりません。

日本ハンドボール協会でも、日本リーグ監督・コーチは資格を取得すべきであるとの意見を出して

おります。

また今後の活用方策についても、研究を重ねて行きたいと考えておりますし、平成6年12月には文部省内にスポーツ指導専門官が設置され、資格の活用について推進されることとなっております。

## 受講者について

受講資格は、規定では「満22才以上で、中央競技団体が認めた者」となっております。平成6年度は募集の40名を上回る応募がありましたが、申込み期日、受講定員等の関係で40名を受講者として日本体育協会に推薦いたしました。

今回の専門講習会は、平成4年度の受講漏れの方々を加えて、別表のごとく43名の方々が受講されます。

## 講習内容について

講習内容については、共通科目と専門科目に大別されることはすでに報告いたしました通りであります。共通科目については、日本体育協会が実施する事になっており、各競技共通で通信教育とスクーリング方式で実施されておりますが、体育学部等で単位取得された科目については受講免除の措置が採られています。また、認定を受けた体育学部卒業者には共通科目の全部が免除されています。

今回報告いたしますのは、ハンドボール競技の専門科目についてでありますが、今回からは、受講者の便宜を計るために、開催日数を1日少なくいたしました関係上、現在（1月20日）のところカリキュラムの詳細については決定しておりません。つきましては平成4年度講習会を例にして講習内容の概略を報告いたします。

1. ハンドボールの特性（コーチの役割、コーチの制度）
2. ハンドボールの歴史
3. コーチ論（一般女子指導論）（義務教育期の指導論）（高校男子・女子）（中学）（一般男子）など
4. 戦術・戦法論
5. 攻撃・防御論
6. 実技実習（防御の個人技能・集団技能）（攻撃の個人技能・集団技能）（ゴールキーパーの技術とトレーニング）
7. 指導実習（指導計画作成実習）（集団・チーム技能の指導）
8. ハンドボールの傷害予防とその処置
9. ハンドボールの特性を生かした体力トレーニング・体力トレーニングの実際
10. ハンドボールの生理学
11. ハンドボールのバイオメカニクス
12. ハンドボールの国際情報
13. ゲーム分析
14. 資格検定試験

### 平成6年度C級コーチ養成講習会
## 参加者名簿

| No. | 氏名 | 所属 | 都道府県 |
|---|---|---|---|
| 1 | 蒲生　晴明 | （日本ハンドボール協会） | 愛知 |
| 2 | 田口　隆 | （本田技研鈴鹿） | 三重 |
| 3 | 丸山　一人 | （小野薬品株式会社） | 大阪 |
| 4 | 高森　賢 | （恵那北高校） | 岐阜 |
| 5 | 岩本　明 | （浦和学院高校） | 埼玉 |
| 6 | 阪本　光宏 | （阪本薬品） | 大阪 |
| 7 | 中川　昌幸 | （関西大学） | 大阪 |
| 8 | 東江　生作 | （浦添市民体育会館） | 沖縄 |
| 9 | 濱津　喜勇 | （西郷養護学校） | 福島 |
| 10 | 安孫子　功 | （安河江高校） | 山形 |
| 11 | 澤井　慎治 | （福岡女子商業） | 福岡 |
| 12 | 黒沢　貞夫 | （旭高校） | 神奈川 |
| 13 | 南木　雅弘 | （城山高校） | 神奈川 |
| 14 | 菊田　政行 | （水海道第一高校） | 茨城 |
| 15 | 岡田　裕之 | （水海道第二高校） | 茨城 |
| 16 | 滝川　一徳 | （伊奈高校） | 茨城 |
| 17 | 増田　徹 | （水海道中学校） | 茨城 |
| 18 | 藤原　初 | （三好農林高校） | 徳島 |
| 19 | 阿部　伸 | （不来方高校） | 岩手 |
| 20 | 松永　智 | （大阪市立大学） | 大阪 |
| 21 | 松本　隆栄 | （明治大学） | 東京 |
| 22 | 田中　宏明 | （境港工業大学） | 鳥取 |
| 23 | 岩本　靖史 | （国府養護学校池田分校） | 徳島 |
| 24 | 斉藤　隆 | （浜田商業高校） | 島根 |
| 25 | 佐藤　公美 | （徳島体育振興公社） | 徳島 |
| 26 | 泉水　孝浩 | （松戸秋山高校） | 千葉 |
| 27 | 野本　孝 | （野木高校） | 愛媛 |
| 28 | 毛利　尊志 | （今治南高校） | 愛媛 |
| 29 | 高橋　卓也 | （高知南高校） | 高知 |
| 30 | 谷口　友一 | （三本松高校） | 香川 |
| 31 | 穂積　豊彦 | （北国銀行） | 石川 |
| 32 | 山根　安彦 | （岩陽高校） | 山口 |
| 33 | 平賀　達也 | （暁高校） | 三重 |
| 34 | 古平　智彦 | （川口養護学校） | 埼玉 |
| 35 | 田口　勝利 | （中村荷役） | 東京 |
| 36 | 井上　亮一 | （夙川学院） | 兵庫 |
| 37 | 高橋　精一 | （桃山学院高校） | 大阪 |
| 38 | 角谷喜代重 | （北陸電力） | 福井 |
| 39 | 朝生　和光 | （大同特殊鋼） | 愛知 |
| 40 | 田中　秀昭 | （北陸電力） | 福井 |
| 41 | 宮下　和広 | （大崎電気） | 埼玉 |
| 42 | 池ノ上孝司 | （ソニー国分） | 鹿児島 |
| 43 | 浅野　隆司 | （生浜高校） | 千葉 |

# スポーツと広報の意義、役割

## NFアタシェ・セミナーより

企画・広報担当常務理事　木野　実

スポーツ界に於ける広報は、スポーツ文化という言葉がこの2、3年飛び交うようになって一層重要な役割になってきました。従来より勿論各々の競技団体に於ても広報という名前がなくても、総務やら企画部門がそれにあたって対応してきたわけでありますが、ハンドボールをやる人に対してもハンドボールを観戦して下さる人、またスポーツ愛好者並びに一般の人達にどう理解し、どう興味をもって、更に両方がうまくコミュニケーションを図っていける配慮が必要かどうか大切な役目であると思っています。

### 企業トップと広報マンは一体

広報という名が出てきたのは、一般企業においては昭和53年、トヨタ自動車、鹿島建設、住友銀行などが相次いで広報部を設けたのがはじまりです。日本オリンピック委員会の中でも広報委員会が発足したのは一昨年の4月でありました。あってもなくてもよい、すなわち盲腸の様なものから、企業トップと広報部室は一体で、役員会議には必ず広報マンが社の取締役として同席する企業も多くなり、広報がしっかりしているところは、会社（企業）もしっかりしているところと位置づけられる程、重要なポジションとなっています。

因に某自動車の社長は、広報室長の話を聞いて行動しているし、アメリカの大統領に於てもスポークスマン（大統領補佐官）は大統領自らが任命している。そのスポークスマンはいかなる時でも大統領と会えるし、独自に情報を伝えられる程的確な情報を把握できていたのである。

私は2年前、広報と企画担当を拝命し、少しでもハンドボールの素晴らしさ、面白さ、ダイナミック、全日本男女のPR、グローバルなハンドボール（現在、世界136ケ国加盟）を世間一般にの方々、マスコミの方々に知って戴く努力をしてきましたが、まだまだ努力不足で、思ったほど理解されてはいません。

### 地方協会の素晴らしい活躍

しかし、地方に於ては各地方協会の熱意と努力で、地元ではかなりのスペースをさいて新聞はじめ地元のTV局でも取り上げられることが多くなり、そのウェーブも大きくなりつつあります。

昨年のアジア大会では、全国のマスコミの関係者から多くの取材を受けました。特に男女全日本の出身県並びに所属チームの県への情報発信としてのニュースが多く見られました。

こういう大きなイベントになれば、最近では運動部所属記者だけでなく、社会、経済部等からの記者も取材する様なことがしばしばで、資料をかなり豊富に用意することが大切になっています。

先日、広報アタシェ・セミナーを受けるチャンスがあり、その中でも昔と違って掛け持ちが多い記者も多いので、スポーツに精通しているとは言えない、素人の集団と考えてほしいというマスコミの話もありました。

アジア大会ではライフル射撃のパンフレットが大変親切であったという評判でしたが、ハンドボールのパンフレットも広島県協会（山本・藤本氏らの）並びにHAGOCの加藤氏らのお骨折りでマスコミからも大変喜んで頂きました。

### マスコミからの要望

報道関係からは我々に次の点を要望指摘された。

＊テレビ関係には①テレビ中継、②ニュース取材、③企画物（ドキュメント）、この①②③をうまく利用すること。

＊インタビューは試合に負けても堂々と会場に出てきて、人前で話をする。自分の言葉できっちり伝える。自立した選手になってほしい。決してマスコミはいじめようとは思っていない。

＊記者発表するかどうかもきちんと決めておくこと。負けて話がしたくなくても、一言「喋りたくない」という言葉でもいい。

＊プロ野球の野村（ヤクルト）、森（元西武）両監督は負けた時の方が面白い。分析して話してくれる。

＊個人ファイル、特に監督、選手のプロフィール作成。こういう人がいるんですよ！という情報は有難い。

＊マスコミと親しくなることは大切だが、なれあいになることはよくないし、緊張関係がくずれることは問題である。

＊プレスリリースの文章は中学生が読める文章でむずかしい字は決して使わないこと。

＊記者が辞書をひく言葉は使わないこと。

この様に直接テレビ、新聞等のマスコミの方から聞く機会があり、大変勉強させられたし、アジア大会を経験させて戴き、またこの度のセミナーを通して幾分理解が深められたことを感謝致します。

また、広報マンの心得として、広報は明確にしかも事実関係のみ発表することである。ややもすると、推測で物を言ってしまうこと等のない様、ニュアンスで決して言わないことである。決してウソはつかないことを強調されたことが強く印象に残っています。

## 広報の意義・役割

広報の意義と役割について講師の弥吉五雄氏は、広報＝経営機能＋コミュニケーション機能と言われている。

すなわち世論やその動向を正しく把握し、それを企業・団体の政策立案に繁栄させる（経営機能）。それに裏付けされた諸活動を正しく世間（社会）に伝達すること（コミュニケーション機能）である。

スポーツに於ては、良い選手、監督、コーチによる良いトレーニング、良い成績を残すことによるチーム作り（マネージメント機能）とチーム全体、選手、ハンドボール競技についての情報を適切に伝えるアピール（コミュニケーション機能）である。

さらに昨今のドーピング問題はじめスポーツ不祥事の非常時の対応により、そのスポーツのイメージが崩れない様に如何に防げるかの危機管理の方が新しいニュースを流すより余程大切になってくる。こういう時こそ正確に伝え、素直に伝えることを教えて戴いた。

まだまだ未熟な点が多いわけですが、理解者、指導者が一人でも多く増やす努力と地味な活動の積み重ねが将来ハンドボールの素晴らしさを知っていただくことになることを頭において活動していきたいと思います。また関係者、役員はじめ競技団体、チーム、そして個人が広報に対する理解と各々が広報マンとしての自覚の上で連携していければ大きな大きなウェーブとして、ハンドボールの魅力、感動を伝えていけるものと確信します。

## コミュニケーション機能の充実

情報発信社会として、日本は社会的にもまだまだ外に向かっての情報発信が出来ていないと言われています。

日本文化はじめスポーツ（ハンドボール）の世界に於てもまだまだ出来ていないので、如何にコミュニケーション機能を内部、外部に向けていけるか課題です。

国内は勿論、時に今後は身近なアジア地域への発信により、日本のハンドボールを理解して戴くためにも、またアジアハンドボール界発展の為にも、出来ることから支援援助していく行動力が今こそ求められ、前進させることが肝要になってくると思います。

そして、これからのスポーツがスポーツ文化そして一般の人達に相互理解を得られる為にも、スポーツ界は「特殊な才能の人の集まりであるという印象を早く払拭すること」であるという鋭い指摘は、一人一人が今後気をつけていかなければならない大切な問題であると強く感じました。

連載第15回
（最終回）

# ハンドボールの指導法

指導委員会委員長　大西　武三

## 高校総体を目指す
## ハンドボール指導者の実態について

先般、山形県の高校指導者・佐藤功氏より「全国高校総合体育大会（ハンドボール）出場校の活動の実態に関する調査研究」が送られて来た。これは第19回全国高等学校体育連盟研究大会（第一分科会）「スポーツの頂点を目指して」のテーマの下で2月初旬に発表されたものである。

平成5年のインターハイに出場した全チームの指導者にアンケートを実施している。この調査から、インターハイを目指す指導者の実態が良くわかり、興味深いものになっているので、今回はこの調査研究を皆様に見てもらうことによって指導法に代えたい。

調査研究を読ませていただいて、私なりの1、2の感想を述べさせていただき、指導法の最終回とさせていただきます。機関誌編集担当者より、指導法を書くように依頼を受け、やってまいりましたが、今3月は役員改選期であり区切りを付けさせていただきます。内容があっちこっちと飛び、筋の通らないまま終わってしまったことをお詫び申し上げます。

### 指導者について

「コーチ10年は曲がり角」と言われるが、そのことがこの調査でもそのことが良く現われている。10年を境に指導者の数が激減している。高校教師は課外活動が主な業務でないが故に、年を重ねる事に、年相応の仕事を求められ、現場での直接の指導は出来にくいものとなる。若いときはなりふり構わず、指導に情熱を傾けることが許されるが10年も経つと「それだけではいけないよ」という周りからの注文が出てくるであろう。仕事上から、自分が属しているハンドボール協会から、家庭から、あるいは自己の情熱や体力の衰えからと個人によっては理由は様々であるが、徐々に現場を離れざるを得ない状況が押し寄せて来る。そのような社会的な環境にあって20年、25年と直接指導しておられる指導者がこの調査から多くおられることがわかる。その情熱には敬服せざるをえない。2足のわらじどころか3足、4足と履きながら奮闘しておられる姿が浮かんできます。

また、指導者として不利な条件であると思われる「担任を持つ」「ハンドボールの競技歴がない」「専門が体育でない」などの条件をクリアしてハイレベルのチーム作りをしている指導者がおられることは、同じ条件を持つ指導者に勇気と希望を与えるものでもある。

### 練習時間について

練習の時間や頻度と言うものは、単に勝つための一要素だけでなく、選手や指導者の生き方を左右する大きな要因と考えられる。高校3年間でインターハイで優勝を目指す場合、誰もがやるような事をしていては勝てないのは明白であり、練習の量や質が問われるのは当然である。この調査でも強いチームほど練習時間が長い傾向になっている。勿論、その中でも、2時間30分以内の練習でインターハイに出てきているチームもかなりの割合で見受けられるが、いずれにしても平日これだけの時間を練習現場に立ち合い指導されているということは大変なことであり、その情熱のなせるわざには感服する次第である。

適正な練習時間というのは一体どれくらいであろうか。自分が選手を預かった期間を一つのスパンと考えるなら、中学校や高等学校では3年である。

通常、インターハイを目指すような指導者なら3年（実際には2年少々）の期間でトップレベルのチームに育てるべき練習を考えるであろう。この短い期間での強化となれば、目いっぱいやらざるを得ない。これを指導者から見た短期スパンと考えるなら、選手から見たスパンと言うものがある。これはその選手が将来にわたってハンドボールを続けるであろうことを見越したスパンである。10年、20年と言う長期のスパンが考えられる。選手の立場から言えば、あるいはナショナルチームを預かるような立場から言えば長期スパンで一貫した指導体制の中で育ててもらいたいものだと思うのは当然の事であろう。

普及と強化はハンドボール界の大きな柱であるが、本来強化は普及の中から生れてくるべきもので

ある。小・中学校における義務教育期に出来るだけ多くの者にハンドボールに親しんでもらい、高校期や大学期なれば、自己の能力によって生涯スポーツハンドボールと競技スポーツハンドボールに分化して進んでいくべきものであろう。

英国のラグビーの著名な指導者ジム・グリーンウッド氏が来日し、指導した3年間の感想をラクビーマガジンに寄せているが、その中で「日本ラグビーの第1の特色はその練習量の多さです。間違いなく〝世界一の練習熱心な国〟であると断言できます。ごくごく普通の大学ラグビーの選手が大学在学中に行う練習量は、私が11才でラグビーを始め29才で引退するまでの18年間より多いのです。これだけの熱心さと練習量をもってして世界一のラグビーチームが出来ないはずはありません」と述べている。またサッカーでの小学生の練習量の国際比較の研究もありましたが、やはり日本がヨーロッパや諸外国に比べてけた違いに練習量の多いのに驚いたことがあります。

短期スパンで勝とうと思えば、これはやむを得ないことである。指導者や選手の夢がこれによってしか実現できないことはよく分かっている。しかし私が心配するのは、この練習量の多さによって失うものも多いのではと思うことである。一つは短期スパンの猛練習で精神的なあるいは身体的な問題からそのスパン後のハンドボールを止めてしまったり、意欲的な取組みが出来ない例である。

二つ目の問題として、進学等を考えれば強いチームに入ってやりたくても飛び込めない者が多くいるに違いないと思われることである。その中には将来のハンドボールを背負うはずの人材も含まれているかも知れない。

誰もがスポーツは好きであり、運動能力のある者は尚更である。小学校、中学校の義務教育期で週3～5日1・5～2時間位、ハンドボールの技術や面白さを指導してくれる環境があれば、恐らくもっともっと多くの人がハンドボールを楽しむに違いないと思われる。そのためには学校教育だけでなく、学校や地域の施設を中心とした社会スポーツとしてのハンドボールを今後はもっと考えられなければならない。

短期スパンの猛練習の積み重ねで選手を育てるというのは、日本のスポーツ社会が作り出した一つの産物である。しかし、このことによるひずみも生じていることも確かである。ハンドボールの豊かな社会を目指そうとするとき、練習時間というものを契機として私達が考えるべきことが多くあるのではないだろうかと思う。（終）

# 全国高校総体（ハンドボール競技）出場校の活動の実態に関する調査研究

山形県立北村山高等学校　佐藤　功

## 一．はじめに

山形県の競技力をみると、一部の種目では全国大会で優勝するなど高いレベルにあるが、他の種目ではまだまだ全国の上位に及ばないようである。これはハンドボール競技にも言えることであり、関係者一丸となって競技力の一層の向上に努めていかなければならない。また、本県はハンドボールの部の設置校が他県や他競技に比べ少なく、強化とあわせて競技の普及・振興という課題も抱えているのが実状である。そうした中で、私自身、施行錯誤を繰り返しながら強化にあたるとき、「全国上位校の指導者は何を考え、どう指導し、チームはどう活動しているのだろう」ということに以前より興味を抱いていた。そこで、全国大会出場校の指導者の実態とその意識、チームの活動の状況を把握するために、アンケート調査を実施することにした。

全国大会出場校並びに強豪高校の活動を知ることにより、今後、本県ハンドボールの競技力の向上と、部活動の充実・普及の一助になればと考え、研究結果をまとめてみた。

## 二．調査対象及びその方法

①調査対象　平成5年度全国高校総体ハンドボール競技出場校（男女各48校計96校）の指導者

②調査方法　質問紙法による。対象校96校にアンケート用紙を発送。

③調査期日　平成5年9月～10月（調査対象期間　平成4月9月～平成5年8月）

④調査内容
ア．指導者について
イ．選手獲得について
ウ．部の活動資金について
エ．所属部員について
オ．練習について
カ．指導について

⑤回答の集計　88校（男子チーム44校、女子チーム44校）から回答があった。回答回収率91・7％、各項目について、全体・男女別・ベスト16（必要に応じてベスト8）に分けて集計した。

## 三．調査方法と思考

(1)指導者について

校内の指導者数を調べてみると、1人（全体の52・9％）または2人（41・4％）という学校が全体に占める割合が高い。この割合は、男女別、公立・私立校別にみてもほとんど変りない。外部からの指導者についてみると0人が全体の83％、1人が15・9％となっており、日常練習においてはほとんどの学校が教員以外からの指導を受け

ていないようである。こうして見ると、ほとんどの学校が複数体制で臨んでいるものと思ったが、1人で指導するという学校が予想以上に多かった。

指導者（顧問）の年令を見ると、40才代が43・2%、30才代・50才代が11・4%であり、30才代・40才代が多いようである。このパーセンテージは、ベスト16の顧問32人についてもほぼ当てはまり、この資料を見る限りにおいては、顧問の年令と大会の成績の相関関係は薄いようである。

担当教科を見ると、保健体育科が89・8%と多くを占めている。男子チームに比べ、女子チームの顧問に他の教科の教員が多い(13・6%)。ベスト16全チームの顧問は、保健体育科であった。担任の有無について見ると、「有り」が38・6%、「無し」が61・4%で、この割合はベスト16チームの顧問についてもほぼ当てはまる。顧問のプレイヤーとしての競技歴は「高校・大学で」が67・8%で、「無し」が16・1%と続く。「無し」の14人のうち、4人の顧問のチームがベスト16に入っている。現在校での指導経験年数を見ると、「6～10年」が31・8%と最も多い。次いで「0～5年」が26・1%と多く、比較的赴任して早い時期に全国大会に出場する顧問も多いようである。しかも「0～5年」の23人中11人がベスト16入りを果たしているのは意外な数値である。また、「11年以上」の顧問は88名中37名(42%、公立19名、私立18名)。「16名以上」は24名（27%、公立11名、私立13名）と、公立高校においても同一校の勤務年数が長いことが特徴的であろう。競技力向上を考えた場合、同一高校に長く勤続して指導できるということも指導者の理想と言えよう。

(2)選手獲得について

ア．いっさい勧誘しないで、入学した生徒だけで活動する。

イ．中学時の優秀選手を勧誘するが、合格に関しては特別に優遇処置はない。

ウ．推薦制度を活用して、優秀選手を獲得する。

エ．中学時の優秀選手は、入学時に考慮する。

男女トータルでみると、「ア」が37・9%と最も多く、続いて「ウ」が次ぐ（27・6%）。男女別に見ると、男子のほうで若干「ア」が多くなるだけで、各事項の割合に違いは見られない。「ウ」に着目してみると、ベスト16のチームでは「ウ」が45・2%と高い割合を占めているのに対し、ベスト16外では56校中10校とわずか17・9%に止まっており、逆に「ア」が44・9%と高くなっている。

女子ベスト8中6校が「ウ」を選択している。私立校全体では「ウ」が53・9%となっている。「ア」の「勧誘しない」や「イ」の「優遇措置はしない」チームが、ベスト16に男女で15校もあることはすばらしいことであるが、全国大会上位入賞を目指すためには、推薦制度を活用するなどして優秀

(1)校内の指導者数

| 校内指導者数 | 1 | 2 | 3 |
|---|---|---|---|
| 男子チーム | 23 | 16 | 4 |
| 女子チーム | 23 | 20 | 1 |
| 計 | 56 | 36 | 5 |

(2)外部の指導者数

| 外部指導者数 | 0 | 1 | 2 |
|---|---|---|---|
| 男子チーム | 36 | 8 | 0 |
| 女子チーム | 37 | 6 | 1 |
| 計 | 73 | 14 | 1 |

(3)顧問について

【a.年令】

| 年　齢 | −29才 | −39才 | −49才 | 50才− |
|---|---|---|---|---|
| 男子チーム | 5 | 15 | 21 | 3 |
| 女子チーム | 5 | 15 | 17 | 7 |
| 計 | 10 | 30 | 38 | 10 |

【b.担当教科】

| 担当教科 | 保体 | その他 |
|---|---|---|
| 男子チーム | 41 | 3 |
| 女子チーム | 38 | 6 |
| 計 | 79 | 9 |

【c.担任の有無】

| 担任の有無 | 有り | 無し |
|---|---|---|
| 男子チーム | 17 | 27 |
| 女子チーム | 17 | 27 |
| 計 | 34 | 54 |

【d.ハンド競技歴（プレイヤーとして）】

| 競技歴 | 高校のみ | 大学のみ | 高校大学 | 無し |
|---|---|---|---|---|
| 男子チーム | 1 | 3 | 35 | 4 |
| 女子チーム | 3 | 7 | 24 | 10 |
| 計 | 4 | 10 | 59 | 14 |

【f.現在校指導経験年数】

| 経験年数 | −5年 | −10年 | −15年 | −20年 | −25年 | 26年− |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 男子チーム | 12 | 14 | 8 | 4 | 6 | |
| 女子チーム | 11 | 14 | 5 | 5 | 8 | 1 |
| 計 | 23 | 28 | 13 | 9 | 14 | 1 |

選手を獲得することも、きわめて重要な要素であろう。

(3)部の活動資金

| (1) 年間の部費 | 10万未満 | 10万～19万 | 20万～29万 | 30万～49万 | 50万～74万 | 75万～99万 | 100万以上 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ベスト16チーム | 1 | 14 | 6 | 7 | 3 | 1 | 0 |
| 上記以外チーム | 8 | 15 | 19 | 9 | 2 | 1 | 1 |

| (2) 部員からの徴収 | 徴収せず | 1万未満 | 1万～2万 | 2万～3万 | 3万～5万 | 5万～10万 | 10万以上 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ベスト16チーム | 12 | 6 | 6 | 1 | 4 | 2 | 1 |
| 上記以外チーム | 12 | 15 | 14 | 7 | 5 | 2 | 1 |

（大会経費含まず）

| (3) 保護者後援会より | なし | 10万未満 | 10万～19万 | 20万～29万 | 30万～49万 | 50万～74万 | 75万～99万 | 100万～149万 | 150万以上 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ベスト16チーム | 11 | 5 | 5 | 2 | 1 | 1 | 1 | 3 | 3 |
| 上記以外チーム | 23 | 7 | 4 | 3 | 9 | 5 | 2 | 2 | 0 |

全国の上位チームになればなるほど、活動資金も多いようである。保護者会・後援会からの援助が増えてくるようである。個々のチームにより、だいぶ差が目立つ結果となった。

(4)選手について

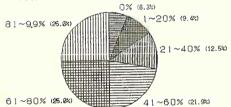
所属部員数はトータルで見ると「20～24人」と「25～29人」がそれぞれ28・4％と最も高い。中学での競技経験者が部員数を占める割合は「0％」が88校中20・5％、「81～99％」が19・3％と上位を占めている。これは、地域によって中学でのハンドボールの普及の度合いが全く違うことを物語っており、高校のスタート段階で競技力にだいぶ差がついていることを示しているようである。また、全国上位のチームほど、中学での競技経験者を揃えているようである（女子ベスト8全チームが50％を越えている）。

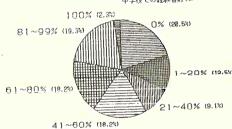
（男子ベスト16チームの平均パーセンテージ60・2％　ベスト8＝49・4％　ベスト4＝44・3％）

（女子ベスト16チームの平均パーセンテージ51・0％　ベスト8＝63・4％　ベスト4＝66・0％）

《所属部員数》

| (1) 部員数 1～3年 | 10～14人 | 15～19人 | 20～24人 | 25～29人 | 30～34人 | 35人以上 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 男子チーム | 1 | 5 | 12 | 12 | 5 | 3 |
| 女子チーム | 3 | 4 | 13 | 13 | 4 | 7 |
| 計 | 4 | 9 | 25 | 25 | 9 | 16 |

男子，女子（ベスト16）32校中
中学校での経験者数（%）

男子，女子88校中
中学校での経験者数（%）

(5)練習について

《1日(平均)の練習時間》

| | 男子 | 女子 |
|---|---|---|
| 全チームトータル | 2時間47分 | 2時間42分 |
| ベスト16 外 | 2時間42分 | 2時間37分 |
| ベスト16 | 2時間55分 | 2時間51分 |
| ベスト8 | 3時間08分 | 2時間46分 |
| ベスト4 | 3時間15分 | 3時間00分 |

| 練習時間（平日） | 1時間30分以上2時間未満 | 2時間以上2時間30分未満 | 2時間30分以上3時間未満 | 3時間以上3時間30分未満 | 3時間30分以上 |
|---|---|---|---|---|---|
| 男子チーム | 1 | 4 | 17 | 16 | 6 |
| 女子チーム | 1 | 5 | 21 | 13 | 4 |
| 計 | 2 | 9 | 38 | 29 | 10 |

1日（平日）の練習時間について見ると、男女全体で「2時間30分～3時間未満」が43・1％、「3時間～3時間30分未満」が33・3％と多い。「3時間30分～」も10チームあった。また、全国上位になるほど、練習時間も長いようである。ちなみに、男子ベスト4チームのそれぞれの練習時間は、4時間・3時間・2時間30分・3時間30分（順不同）で、女子のそれは、3時間30分・2時間・3時間・3時間30分であった。短時間で効率のよい練習、中身の濃い練習も大切とされるが、やはり絶対的な練習量ということも必要なようである。また、練習時間については、68・2％の顧問が「適度」、29・5％が「短いと思う」と答えており、10人中7人の顧問が練習時間についてはほぼ満足しているようである。練習の休みは「取ってない」が44・3％（ベスト16チームで50・0％）、「週に1度」が22・7％（同18・8％）と割合が高く、また、全体の67・9％が「適度」、30・8％が「少ない」としており、「練習の休み」をどう取るかは、指導者によって考え方が違っているようである。

一方、年間の高校生との対外試合数を見ると（25分ゲーム×2を1試合として）、男女全体で「40～59試合」が27・6％、次いで「20～39試合」が21・8％と多いようである。ベスト16チームについては、「40～59試合」が31・3％、「100試合～」が25・0％と高い割合を占める。ベスト16チームとそれ以外のチームを比べると、「100試合～」がベスト16チーム中8校（25・0％）、

《練習の休み》

| 練習の休み（定期的） | 週に1度 | 10日に1度 | 月に2度 | 月に1度 | 取っていない |
|---|---|---|---|---|---|
| 男子チーム | 12 | 4 | 2 | 8 | 18 |
| 女子チーム | 8 | 2 | 4 | 9 | 21 |
| 計 | 20 | 6 | 6 | 17 | 39 |

| 練習の休み（定期的） | 週に1度 | 10日に1度 | 月に2度 | 月に1度 | 取っていない |
|---|---|---|---|---|---|
| ベスト16 | 6 | 1 | 3 | 6 | 16 |
| 上記以外 | 14 | 5 | 8 | 11 | 23 |
| 計 | 20 | 6 | 8 | 17 | 39 |

以外のチーム55チーム中7校（12・7％）で、「0～39試合」がそれぞれ2・9％（32校中7校）、38・2％（55校中21校）と大きな差が見られ、概して成績上位高ほど試合数をこなしている傾向にある。また、大学生・実業団との試合は、全体で「0～9試合」が60・0％を占め、「10～19試合」が23・5％、「20試合～」は16・5％となり、高校生との試合数に比べかなり少ない。また、対外試合数について、顧問は、うち48・9％が「適度」とし、46・6％が「少ない」と考えている。ベスト16チームの顧問もほぼこの数値と同じである。「高校生と60試合以上」の顧問35名中、23名（65・7％）が「適度」、10名（28・6％）が「少ない」としている。

県外遠征数については、男女全体で「3～5回」が41・2％、「6～10回」が25・9％と高い割合を占める。男子チームに比べ、女子チームの遠征回数が多いようである。多いところでは「40回で60日」「34回で81日」など、30回を超えるチームが女子に4チームあった（男子1チーム）。また、男子では、大会上位チームほど遠征回数が多いとは言い難い（逆に少ない）が、女子チームでは、上位チームほど遠征の回数、日数とも多くなっている点が目立ち、県外遠征の実施が強化の方策として定着しているようだ。ちなみに、男子ベスト8に入っているチームの遠征日数は、多い順に35日・30日・15日・16日・10日・10日・10日・7日であるのに対し、女子は60日・60日・55日・30日・20日・20日・18日・4日となっている。遠征数に男女全体で52・9％が「適度」、43・8％が「少ない」、2・3％が「多い」としており、この割合はベスト16チームをとってみてもほぼ同じである。

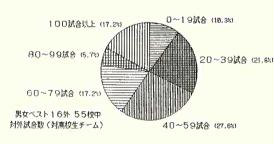
(6)指導について

「大会での目標の設定方法」を見ると、「監督・コーチが決める」が48・3％、次いで「監督・上級生で」が28・7％、「監督・部員全体で」が16・1％、「部員だけで」4・6％、「上級生だけで」2・3％と続く。ベスト16チームについてもほぼ同じである。「監督・コーチが決める」が予想以上に多い結果となった。

「練習方法・メニューの決め方」では、「監督・コーチが決める」が75・0％、「監督・上級生で」20・5％であった。やはり、監督が主体となって練習を進めているチームが多いようである。

「指導者自身の指導技術や指導力を向上

男子,女子87校中
対外試合数（対高校生チーム）

男女ベスト16外 55校中
対外試合数（対高校生チーム）

100試合以上 (12.7%)
0～19試合 (12.7%)
80～99試合 (5.5%)
20～39試合 (25.5%)
60～79試合 (18.2%)
40～59試合 (25.5%)

男女（ベスト16）32校中
対外試合数（対高校生チーム）

0～19試合 (6.3%)
100試合以上 (25.8%)
20～39試合 (15.6%)
80～99試合 (6.3%)
60～79試合 (15.6%)
40～59試合 (31.3%)

《県内遠征回数》

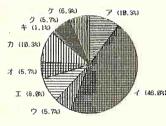
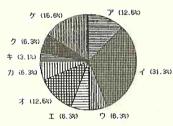
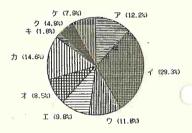
| | 男子 | 女子 |
|---|---|---|
| トータル | 6.3回 | 8.2回 |
| ベスト16 外 | 6.9回 | 7.8回 |
| ベスト16 | 5.0回 | 9.2回 |
| ベスト8 | 4.5回 | 13.7回 |
| ベスト4 | 4.5回 | 10.8回 |

《県外遠征日数》

| | 男子 | 女子 |
|---|---|---|
| トータル | 15.3回 | 23.6回 |
| ベスト16 外 | 15.6回 | 22.6回 |
| ベスト16 | 14.7回 | 25.3回 |
| ベスト8 | 16.5回 | 33.4回 |
| ベスト4 | 14.3回 | 34.3回 |

させるために参考にしていること」では、第1位に挙げた事項を見ると、男女全体で「オ」が37・9％（87名中33名）と最も高い割合を占め、次いで「カ」が20・7％（18名）。「キ」「ウ」「イ」が10％（9名）前後で続く。ベスト16の顧問についてみると、「オ」「カ」がそれぞれ31・3％（32名中10名）を占め、上記に比べると「オ」の割合が減り、「カ」が高くなっているようである。このことから、全国上位チームの顧問が大学・実業団の監督とより深い交流があり、彼等と意見の交換の中で自らの指導力を高めていることが窺えよう。男女ベスト16について見ると、男子が16校中7校（43・8％）が「オ」、女子16校中8校（50・0％）が「カ」が最も高く、両者に違いが見られた。男子全体を見ても「カ」の選択者は43校中5校（11・7％、女子は29・5％）と少なく、男子チームは女子ほど大学・実業団との結び付きは少ないと思われる。

「競技力向上で苦慮していること」について、第1位に挙げた事項を見ると、男女全体で46・7％（88名中40名）が「イ」と答えており、最も高い（男子39・5％、女子52・3％）。「ア」「カ」が10・3％と次いでおり、「イ」を除く他の事項の割合は低いようである。優秀選手の獲得に苦慮している学校が多く、特に女子チームに顕著に表われている。ベスト16・外別に見ると、両者で各事項で大きな違いが見られるのは、「イ」（ベスト16ず31・3％、ベスト16外が55・6％）、「ケ」（同15・6％・同1・9％）、「オ」（同12・5％・同1・9％）であった。ベスト16チームでは、占める割合が低くはなる

ア．運動学全般の専門書　イ．ハンドボール専門書　ウ．指導ビデオ　エ．実技指導講習会
オ．高校生指導者との意見交換　カ．大学・実業団指導者との意見交換　キ．高校生のゲーム
ク．大学・実業団のゲーム　ケ．その他　コ．とりたててない

ア．施設が不十分　イ．優秀選手の獲得　ウ．指導スタッフの不足　エ．練習時間の確保　オ．活動資金が不十分　カ．練習相手が近くにいない　キ．学校・保護者の理解と協力　ク．その他　ケ．とりたててない

が、やはり「イ」が最も高く、順に「ケ」「ア」「オ」（ともに12・5%）となり、男女全体に比べ「イ」が減った分「オ」「ケ」が増えたようである。男女ベスト4について見ると、男子が「イ」「オ」「ケ」「イ」、女子が「ク」「イ」「ア」「ケ」（順不同）であった。ベスト16外・16・8・4と上位になるほど、各事項の選択の割合は均等化し、特定の事項に偏らない傾向にある。男女別では、男子チームは女子に比べて「イ」の割合が減った分、「ウ」「エ」（ともに11・6%5校）の割合が多い。

「日常の指導において、技術指導以外で特に大切と思っていること」について、自由記述してもらったことを男女チームに分けてみると（前・男子チーム顧問、後・女子チーム顧問）次の通りであった。

- 基本的な生活習慣（16／8）
- 精神力の向上（4／9）
- 人間性（6／10）
- 生徒の自主性（7／1）
- 文武両道（4／9）
- 監督と選手のコミュニケーション（1／3）
- 礼儀（2／1）
- その他（各1）

(7)競技力向上で必要なこと

最後に「競技力向上で必要と思うこと」について、各指導者に記述してもらったことを3項目に分類してまとめてみると、次の通りである。

【指導者側に求められること】
- 情熱、努力、研究心 (17)
- 有望選手の獲得 (13)
- 遠征、対外試合の実施 (11)
- 計画的な練習と方法の工夫 (10)
- 中・高一貫した指導 (10)
- 競技の普及 (6)
- 生徒との信頼関係 (4)

【生徒側に求められること】
- 基礎体力、基礎技能 (14)
- 意欲的取り組み (10)
- 目的意識 (6)
- 精神面の向上 (6)
- 毎日の反復練習 (5)
- 技術の理解・理論 (2)
- 集中力 (2)

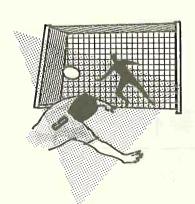
【その他】
- 施設の充実、確保 (7)
- 十分な活動資金 (6)
- 学校・保護者の理解 (2)

男女ベスト4チームの顧問は、「全国レベルとの練習試合、資金」「限られた様々な条件の中で全てに最善を尽くす」「指導者の情熱」「指導者の努力、良い（技術・性格）生徒を集める」「心・技・体のバランスのとれた練習計画を立案し、生徒の状況に応じた指導」「全国の技術用語の統一」「皆（選手・スタッフ・保護者）が同じ目標を持ち、最大限の努力をする」を挙げている。全体的に見ると、「指導者の情熱」「選手の基礎体力、基礎技能」「有望選手の獲得」を多く挙げている。選手については、「基礎的な体力・技能」の他、「目的意識や意欲、集中」など、主に意識や精神面を言及するものが目立つ。総じて、指導者側に関する内容のものが多く、生徒に求められる事項についても指導者の指導事項の範囲であることをみても、指導者そのもののあり方は競技力の向上と深くかかわり、大きなウェイトを占めているようである。また、指導者湯の割合が単なる競技の技術指導のみに止まらず、指導・内容が多岐に亙ることからも言えよう。

## 4．まとめ

今回の調査結果により、全国大会出場校の実際について、今まで明らかでなかったことがある程度把握できたように思う。学校により、練習時間・休み・中学時の経験者・試合数等、活動の実態にだいぶ違いが見られる結果となった。全国強豪校（ベスト8）の活動については特別に興味・関心があったが、強豪校にほぼ共通した事項を拾ってみると、次の点が挙げられる。「推薦制度を活用して有望選手を勧誘し、中学時の競技経験者は部員の50%を超える。平日の練習時間は3時間以上で、高校生との年間の対外試合は60試合を超え（半数が80試合以上）、県外への遠征日数は、男子で10～30日、女子で20～60日である。保護者からの資金の援助が他と比べて多い。高校生指導者、あるいは大学・実業団の指導者との交流を通して指導者自身の指導力の向上を図る」などである。

やはり、中学時の競技経験者、練習時間、対外試合数など数的面で他のチームを上回っている傾向にあり、強豪チームは勝つための条件をそろえているようである。これは、指導者が「全国優勝」を念頭に捉え、そのために必要とする環境・条件を一つ一つ整備しているからで、指導者の努力の跡と言える。また、ベスト4のチームの中には「練習時間2時間（学校の下校時刻の関係で）」「中学時の競技経験者0人」という学校があることも事実である。恵まれない条件を他の分野でうまく補った指導者の工夫が窺える。競技力向上を考えた場合、(7)の項で述べたように、「指導者の在り方」が大きなウェイトを占めることは、指導者自身も認めている。「条件が悪いから勝てない」「与えられた・限られた条件だけで○○を目指す」といった消極的な考えでなく、確固たる目標をもち、その達成に必要な様々な条件を改善・整備していこうとする姿勢が、今回調査した指導者に共通して見られたように思う。

全国レベルの部活動の実態のすべてを知ることができたわけではないが、今回の調査で県内高校の競技力の向上、部活動の充実のための一つの指針になれば幸いである。

# フリースロー時のゴールキーパーの視線

## 一．はじめに

ハンドボール競技では、反則を犯した相手方チームにフリースローが与えられ、その位置から直接または間接的なシュートが許されている。フリースローからのシュートには多種多様な戦法が用いられている。

本研究は、ゴール中央付近からのフリースローの3例（例1：ロングシュート、例2：変則回り込み、例3：ステップシュート）を中心に、ゴールキーパー（以下GKと記述）がオフェンスやシューターの身体部位のどこに注視点があるのか、また視点のの軌跡がどのように変移するのかを測定し、GKの競技力向上に役立てることを目的とした。

## 二．測定方法

被験者：男子GK6名で全日本選手、体育系N大学生2名、高校生1名および中学生1名とし、それぞれの競技歴は12年から2年である。

測定機器：GKの注視点・視点の測定には竹井機器工業KK製（TKK930）を使用した。

測定条件：シュートの条件を統一するため、N大学選手の模擬ゲームをビデオ映像に収め、そのうち3例を（先述）を選び測定に使用した。

被験者のGK6名には、アイカメラを頭部に装着し、椅子に坐位姿勢で頭部をビデオ画面前に固定した状態から、シュートボールをできるだけ速く正確に判断して防御するように指示した。

データ処理：解析処理プログラムを用いて視線の軌跡（deg/sec）、注視点、視線を分析した。

GKの防御：シュート時のオフェンスやディフェンスの動きに対し、どのようにGKが対応したかの感想を整理した。

## 三．結果と考察

(1) シューターがボールをキャッチしてからシュートまでの時間経過および注視点の部位は図1に示すとおりである。

(2) 各種シュートの視点の軌跡は図2に示すとおりである。

(3) 注視点の部位、視点の軌跡およびGKのシュート防御時のコメントをフリースロー各例ごとに考察した（表1）。

例1（中央からのロングシュート）：注視点、視点とシュート直後のGKコメントとの対比をみると、いずれのGKもボール保持と予測されるオフェンス選手⑤④③に視線が向けられており、とくに⑦にパスされ、直接シュートと予期しているのか、視線がその周辺に集中している測定結果とコメントは一致している。

日本や世界の一線級選手のボールスピードは100～120km／hで飛来してくるので、ボールがシューターの手から離れてからGKが防御動作を起こすのでは対応できない。したがってフリースローのポイントが決まり次第、速やかにディフェンスに対するGKからの位置を指示すべきである。

例2（変則回り込みシュート）：視線の軌跡で全日本選手（橋本・林）両名が他GKと相違して類似の軌跡を示したのは、注視点のポイント（眼のつけどころ）が日本のトッププレイヤーの共通点と推測される。注視点の傾向としては、6名中4名がボールを注視し、次いで顔→胸→肘に転移し、多くの注視点から情報を収集した決断による防御行力である。

例3（ステップシュート）：シュート直後のコメントでは、橋本は中央のロングシューター⑥の警

**表1　各種フリーシュート時におけるGKの視線の動き**

| 区　分 | 選手名 | 例1　中央からのロングシュート | 例2　中央からの変則回り込み | 例3　中央からのステップシュート |
|---|---|---|---|---|
| シュートまでの時間経過 | | 528秒 | 990秒 | 462秒 |
| 注視点の部位 | 橋本(12年)全日本<br>林 (11年)全日本<br>小寺(9年)大学生<br>西浦(5年)大学生<br>黒田(2年)高校生<br>福司(2年)中学生 | 顔→胸部<br>胸部<br>胸部<br>顔<br>顔 | ボール→顔→顔→胸<br>ボール→顔→顔→顔→顔<br>→顔<br>ボール→胸→肘<br>ボール→ボール→胸<br>顔→顔→顔→顔→顔 | 胸→顔<br>注視点なし<br>見えない<br>選手③確認出来なかった |
| 視線の軌跡 | 橋本(12年)全日本<br>林 (11年)全日本<br>小寺(9年)大学生<br>西浦(5年)大学生<br>黒田(2年)高校生<br>福司(2年)中学生 | 類似した軌跡<br>ボール保持選手⑦に向いている | 類似した軌跡<br>橋本・林に比して長い(大きい) | 選手③<br>ステップシュート直後<br>選手⑤④③、⑥ |
| コメント | 橋本(12年)全日本 | ④⑤のディフェンスの間があきすぎている | ディフェンスの体制が不十分であったので、シューターに対して前につめた | 中央にいるロングシューターの走るスピードがないのでシュートはなく、ここでは③が左寄りのシュートなので対応できる |
| | 林 (11年)全日本 | ここではディフェンスが防御をしていない。シューターの肘を見た | ボールを持っているプレイヤーと、回ってくるプレイヤーがよく見えたので好位置がとれた | ロングシューターを警戒しすぎたために、③に対しての反応が遅れた |
| | 小寺(9年)大学生 | シューターの肩の開きを見てシュートコースを判断した | ボールを持ったシューターが走り、さらに次に走ってくるプレイヤーにパスをしたのが見えたので対応できた | シューターがディフェンスの死角になっていた。ゴール左寄りに位置どりをして対応した |
| | 西浦(5年)大学生 | シューターがシュートするコースを見たので、それに対応ができた | ここでは前に出てシュートを誘った | ロングシューターがシュートと見せかけていたが、シュートはないと判断し対応した |
| | 黒田(2年)高校生 | 手の振りを見た | コメントなし | ボールを持っているプレイヤーが見えなかったので反応が遅れた |
| | 福司(2年)中学生 | 腕を見ていた | コメントなし | 腕を見ていた |

戒や、GKから見たシューターがディフェンスの死角となり確認できないことや、ボール保持のプレイヤーが確認できない理由などで、シューターへの対応が遅れたという。

しかし橋本を除く5名の視線は、オフェンス③のステップシュート直後も、視線がオフェンス⑤④③⑥の周辺にあってコメントとは一致していない。すなわち5名のGKはともにオフェンス③のステップシュートを全く予期していなかった。このことは、フリースロー防御法としては、シューターに対し死角にならない位置と、攻撃者と防御者との位置関係の確認、周辺の状況からの詳細な情報収集によりティフェンスとの連携した防御体制が必要といえよう。

例① 中央からのロングシュート

例② 中央からの変則廻り込みシュート

例③ 中央からのステップシュート

図－1　ボールをキャッチしてからシュートまでの時間経過と注視した部位

（ボール／顔部／胸部／肘部）

図の記号説明：攻撃プレーヤー、防御プレーヤー、プレーヤーの進路、ドリブル、シュート、ブロック、ボールの進路

| 氏名 | 競技歴 |
|---|---|
| 橋本（全日本） | 12年 |
| 林（全日本） | 11年 |
| 小寺（大学生） | 9年 |
| 西浦（大学生） | 5年 |
| 黒田（高校生） | 2年 |
| 福司（中学生） | 2年 |

例① 中央からのロングシュート（528sec）　例② 中央からの変則廻り込みシュート（990sec）　例③ 中央からのステップシュート（462sec）

図－2　各種シュートの視線の軌跡

## 四、まとめ

(1) GKは、速やかにディフェンスとの位置関係を確認し、死角にならない位置どりが必要となる。

(2) 例1（ロングシュート）では、視線の軌跡とコメントが一致したが、例3（ステップシュート）ではコメントとは一致しないことがわかる。

(3) 例2（変則回り込み）では、最初の注視点は6名中4名がボールに注ぎ、次いで顔、胸、肘等に移転し、各GKの注視に特徴がみられた。

（監修：スポーツ医科学委員長　西山逸成）

ハンドボール競技における

# 外傷・障害に関する調査報告

## 第　1　報

**関西学生ハンドボール連盟**

山崎　武・東　嘉伸・樫塚正一・大内勝夫・早川清孝・福井孝明
赤塚　勲・土井秀和・宍倉保雄・梶浦英善・常岡秀行・小西博喜

## ●はじめに

近年、学生スポーツに多発するスポーツ外傷・障害に関して、ハンドボール選手もその例にもれず増加する傾向にあることは、社会的に、教育上の問題としても注目すべき事実である。そこで、今回われわれは、関西学生ハンドボール連盟に所属する男女選手を対象に、ハンドボール競技による外傷・障害の内容についての調査を行い、その頻度や特徴について分析し、その対処法ならびに予防対策等について検討を加えることにした。

## ●方法

調査対象は、1994年度関西学生ハンドボール連盟に加盟する男子1～6部41チーム、女子1～4部28チームの全員を対象とし、質問紙法によるアンケート調査を実施した。

アンケート結果は、男子29チーム274名、女子25チーム192名、合計466名の回収ができたので報告する。

## ●結果と考察

スポーツ活動によって発生する外傷や障害は、健康に対する関心の高まりとともに、中・高・大学ハンドボールクラブ選手に於ても徐々に増加する傾向にあると思われる。また、学校保健の面でも学生、生徒の授業やクラブ活動等に於ける外傷・障害に対する事前の予防措置や事故対策については、競技種目によってそれぞれの特徴がみられるが、教育現場に於ても適切な指導管理を考えていく必要がある。

スポーツ障害とは、1回の外力によって生じた生体の異常、すなわち、打撲、捻挫、脱臼、突指等のいわゆる急性の「けが」であり、一方、スポーツ障害は、小さな外力が同じ部位に繰り返し、かかり続けて生じたいわゆる慢性の「故障」、例えばテニス肘、野球肩、疲労骨折等が該当することを質問に先立って確認した上で、外傷と障害を別にして調査した。

また、具体的な質問事項として、外傷に関しては、その部位、程度、時期、さらに治療を受けた施設、治療内容、ハンドボールの試合、練習を休んだ期間、そしてその外傷の現在の状態、つまり完全に治癒して全く影響がないのか、或は何か後遺症が残存してプレーに支障があるか、あるとすれば具体的にどんな支障があるのか。例えば、捻挫ぐせが残ってジャンプした時に痛みがでるといったことについても記載させ、障害に関しても同じ内容の質問を実施した。

その他、身長、体重、ハンドボール競技の開始時期（経験年数）、現在の練習時間（頻度）、ハンドボール競技以外の種目で外傷等がプレーに影響を及ぼしていればその内容、そして、スポーツ外傷や障害について予防も含めて日常の注意、工夫している点等についても調査した。

**ハンドボールによる外傷・障害調査**

| 順位 | 項目 ＼ 性 | 男　子 | 女　子 | 合　計 |
|---|---|---|---|---|
| | チーム数 | 29 | 25 | 54 |
| | N | 274 | 192 | 466 |
| 1 | 足関節捻挫 | 99(36.1%) | 81(42.2%) | 180(38.6%) |
| 2 | 突指 | 40(14.6%) | 34(17.7%) | 74(15.9%) |
| 3 | 腰痛 | 35(12.8%) | 27(14.1%) | 62(13.3%) |
| 4 | 膝外傷・障害 | 30(10.9%) | 26(13.5%) | 56(12.0%) |
| 5 | 肩外傷・障害 | 14( 5.1%) | 13( 6.8%) | 27( 5.8%) |
| 6 | 肉ばなれ | 10( 3.6%) | 8( 4.2%) | 18( 3.9%) |
| 7 | 疲労骨折 | 7( 2.6%) | 10( 5.2%) | 17( 3.6%) |
| 8 | 肘外傷・障害 | 5( 0.2%) | 4( 1.6%) | 9( 1.9%) |
| 9 | アキレス腱炎 | 1( 0.4%) | 5( 2.6%) | 6( 1.3%) |
| (注) | 足関節捻挫ぐせ | 38(13.9%) | 33(17.2%) | 71(15.2%) |

外傷で最も頻度の高かったのは足関節捻挫で、男女合計180名、38・6%が既往ありと答え、男子は99名、36・1%、女子は81名、42・2%で、女子にやや受傷率が高い傾向が見られた。この足関節捻挫に関しての問題点は「捻挫ぐせがついた」と記載した選手が男女合計71名、15・2%、男子38名、13・9%、女子33名、17・2%とかなり高率に見られた点である。足関節捻挫に次いで頻度が高かったのは突指で、男女合計74名、15・9%、男子40名、14・6%、女子34名、17・7%であった。

次に外傷と障害を含めた受傷部位をみてみると、腰部62名、13・3%、膝関節56名、12・0%、肩関節27名、5・8%の順となっており、肉ばなれ18名、3・9%、疲労骨折17名、3・6%、そして、肘関節9名、1・9%であった。

受傷部位として、足関節、腰および膝関節はハンドボール競技に限らず、他の競技種目においても外傷・障害の好発部位として常に上位にランクされている部位であり、今回の調査でも同様の結果が得られた。さらに、突指については球技種目で多発する外傷であり、手指の関節数が多いため、全体的にハンドボール競技でも頻度が高い外傷であった。

さらに、膝の外傷と障害を比較すると、56名中、外傷が男女合計39名、69・6%、障害17名、30・4%、膝では男女とも外傷がほぼ7割を占めていた。これは膝が多くの靭帯や半月板等によって構成されているという解剖学的な特徴から外傷を受けやすい部位であるのと、膝の障害に対する認識が相対的に低い傾向があるために、障害の頻度がやや低い結果になったと考えられる。一方、肩では、外傷が男女合計14名、障害13名でほぼ同数という結果がみられ、男女間の有意差も認められなかった。

また、肉ばなれに関しては、男女合計18名のうち、部位の記載があった14名中、大腿11名、下腿3名で、大腿部に多い傾向がみられた。そして、過労性障害すなわち疲労骨折およびシンスプリントという骨膜炎も含めた障害、さらに構造的に負荷を受けやすいアキレス腱の障害も、走る、跳ぶ機会の多いハンドボール競技では比較的頻度の高い障害といえよう。

## ●まとめ

以上、今回の調査結果から、特筆すべきことは、足関節捻挫後に「捻挫ぐせ」が残ったと回答した選手が男女合計71名、捻挫既往者180名中の39・4%、ほぼ4割という高率にみられた点である。捻挫とは「関節にその生理的な可動域を超える外力が働いた場合に、関節構成体である靭帯や関節包等が損傷を生じたもの」と定義される。さらに、捻挫は最も軽傷であるI度から重症のIII度までに分類されるが、III度は靭帯が完全に断裂したものが該当する。足関節の捻挫は内がえしストレス、すなわち足背部（足の甲）が外側を向いてしまうような外力が作用した場合に発生する頻度が高く、それで足関節の外側靭帯損傷が生じやすいことになる。この外側靭帯の完全断烈、すなわちIII度の捻挫が生じて靭帯の修復が良好に進まなかった場合に、後遺症として関節の不安定性が残存し、しばしば捻挫を繰り返す状態となる。従って、「捻挫ぐせ」を残さないようにするためには、初回受傷時の性格な診断と適切な治療が寛容といえる。さらに、治療に際してのリハビリテーションでは、足関節の背屈と底屈のみの運動だけではなく、内がえしの外力に対抗する外がえしのパワーを発揮させる腓骨筋の筋肉トレーニングが重要であると考えられる。

今後はハンドボールの経験年数や競技レベル、選手の体格、受傷時期および練習時間と外傷・障害との関連等についても検討を加えたいと考えている。（この要旨は第41回日本学校保健学会1994年大阪において発表した）

# 国際情報

IHF広報78号より（一部修正してあります）

●マレーシアとジンバブエがIHF加盟国になり、ボスニアヘルツェゴビナが準加盟国になった。これでIHF加盟国は136ケ国になった。

★　★　★

●スーダンは追放を解除された。

★　★　★

●1995年コーチ・レフェリーシンポジウムがエジプトにおいて6月17日から23日まで開催される。スローガンは「革新—継続しているハンドボールの発展」である。

主なテーマは次の通りである。

戦術的革新（ハンドボールのスペースの増加）

ルールの変更とゲームの構成を変化させるもの、レフェリーのトレーニングと観察

★　★　★

●エリック・エリアスの新しいハンドボールの提案　3×20分で60分

エリック・エリアス（PRC委員長：スウェーデン）はハンドボールをもっと魅力的にするためのちょっと変わった提案をした。20分を3回行い、1回のポイントは2点とするものである。試合はしばしばハーフタイムで決定しており、緊張ははじめの頃に終っているという考えから来ているのであるが、ゲームを3つのセクションに分割し、それぞれを個別に評価するものである。

例えば、最初の20分でAチームが10—4で勝つと2ポイントを得る。次の20分は0—0から始めて、Bチームが頑張って8—7で勝つとする。するとBチームは2ポイントを獲得する。最後の20分はAチームが10—8で勝てば4：2ポイントでAチームの勝ちである。点差は離れているが、観衆は少なくとも2回のエキサイティングなセクションを見ることになる。もしあるセクションが同点の時はポイントは1：1である。

これは将来のハンドボールゲームは6ポイントからなり、競技はポイントに関して言えば6：0、5：1、4：2または3：3で終ることを意味している。

2、3の加盟国はすでにこのアイデアを取り入れ、次のシーズンは試行しながら新しいシステムによってプレイするであろう。

★　★　★

●ビーチハンドボールは今や国際的である。

ビーチハンドボールを紹介して2年経過したが、イタリアハンドボール連盟の基本的な活動は今や公的となり、国際的にも認められたものになった。最近のIHF会議では全ての代表者の前でデモンストレーションがなされた。目的はインスピレーションを刺激し、基本的ルールを示し、会議の参加者に意見を聞くことであった。

ビーチハンドボールは、既にIHFの広報委員会が参加していた5月のイタリアでの前回のミーティングで最も重要なポイントになっていた。広報委員長であるヘルマン（ドイツ）はビーチハンドボールは特に野外のハンドボールとして見られるべきであり、グランドのあるタイプ—砂、芝生またはその他のもの—国の特色によるが—のうえの屋外でプレイされるべきであると強調している。

ビーチハンドボールは一種の広告として存在し得るようになった。それで国際的なデモンストレーションプログラムは既に子供を演技者として計画された。また、ゲームの戦術的特徴ゆえに、競技者にとっても有用な選択肢となるであろう。

ラルフ・デヤゴ、イタリアのハンドボール連盟の前会長であり、この仕事に責任を任されていたのであるが、彼は規則に関して二つの違った議論について述べた。イタリアの規則は2年間既に試行された。オランダの提案は伝統的なハンドボールに近かった。両方ともフィールドで既にテストされた。

★　★　★

●1995年世界男子ハンドボール選手権大会（アイスランド）

レイキャビックスポーツアリーナは5月にアイスランドで開催される第14回世界ハンドボール選手権大会の抽選会場であった。

IHFのCOC委員長であるデンマークのエリック・ラーセンがテレビカメラの前で著名なスポーツマンや政治家と一緒に抽選をした。アイスランドのナショナルチーム全員と何千というハンドボールファンは（ほとんどが若い人であったが）それを見守っていた。

ホスト、アイスランドは抽選結果に満足した。予選リーグでアイスランドはアジア、アメリカ、アフリカの代表とハンガリーとスイスに当たる。結果は次の通りである。

▽Aグループ
スイス・アイスランド・ハンガリー・チュニジア・韓国・米国

▽Bグループ
ロシア・チェコ・クロアチア・キューバ・スロヴェニア・モロッコ

▽Cグループ
フランス・ドイツ・デンマーク・日本・アルジェリア・ルーマニア

▽Dグループ
スウェーデン・スペイン・エジ

プト・ベラルーシ・ブラジル・クウェート

試合の方式は、各グループで予選リーグの後、決勝トーナメントによって優勝国が決められる。決勝トーナメントに進めるチームは予選リーグの4位までであり、16か国である。

★　★　★

●1995年女子世界選手権大会オーストリア／ハンガリー

標題の大会はオーストリアとハンガリーの共同開催で今年12月に開催されるが、組み合わせは次の通りである。

▽Aグループ
ノルウェー・スウェーデン・オーストリア・日本・象牙海岸

▽Bグループ
デンマーク・チェコ・ルーマニア・アメリカ大陸2・スロバキア

▽Cグループ
ドイツ・ロシア・大韓民国・アンゴラ・中華人民共和国

▽Dグループ
ハンガリー・クロアチア・アメリカ大陸1・ウクライナ・アメリカ大陸3

★　★　★

●アルゼンチンでのジュニア男子世界選手権大会：アメリカで初の大会

評議会がアルゼンチンに決定していた1995年ジュニア男子世界選手権大会は始めてアメリカ大陸で開催される。8月22日から9月3日。日本はアジアで代表権を取れなかったため不参加。

★　★　★

●ブラジルでのジュニア女子世界選手権大会

男子のジュニア世界選手権大会に引き続いて開催される女子ジュニア大会は、ブラジルのリオデジャネイロやサンパウロから飛行機で3～4時間のところにある北西の位置にあるアンジェラで開催される。

★　★　★

●FISU（世界学生スポーツ連盟）：初めて女子世界選手権大会

スロバキアのプラティスラバがFISUの最初の女子世界学生選手権大会の開催地であった（注：昨年夏）。2グループで予選リーグが行われ、チェコと隣国のスロバキアが決勝に進んだ。結果は次の通りである。

▽1・2位決定戦
スロバキア18―13チェコ

▽3・4位決定戦
ルーマニア25―21ハンガリー

▽5・6位決定戦
大韓民国28―21日本

▽7・8位決定戦
ロシア29―17ドイツ

▽9・10位決定戦
クロアチア25―16ブルガリア

▽11・12位決定戦
ポーランド30―24チャイニーズタイペイ

★　★　★

●アディダスとIHFが、その年（1994年）のワールドハンドボールプレイヤーを選出した。

マイア・ヘグタール・ヘルマッソンとタレントのドイシバエフが1994年ワールドハンドボールプレイヤーである。ワールドハンドボールマガジンの読者が、IHFとパートナーのアディタスとともに開催したコンペで決定した。

男子の場合、1993年世界選手権大会優勝のロシアチームとスペインのトップチームであるテカ・サンダンダーの一員である素晴らしいテクニカルプレイヤーであるドイバエフがスウェーデンのマグナス・アンデルセンやクロアチアのイズトック・プックを抑えて選ばれた。

女子の場合は締め切りまで白熱していた。愛すべきヘグダール・ヘルマッソンはスウェーデンナショナルチームとヨーロッパカップの勝者であるヒポニーダァ・エースタァ・ライヒの両者でセンセーショナルを引き起こしたが、デンマークのアンデルセンやドイツのウルバンケを少し抑えて選ばれた。

★　★　★

●1995―1997のIHF行事

▽総会
1996年7月14～18日
ヒルトンヘッド　アイスランド（USA）

★　★　★

●シンポジウム

コーチ、チーフレフェリーシンポジウム
1995年6月17～23日
エジプト

コーチとレフェリーの個別のシンポジウムは1997年に開催される。カナダがコーチシンポジウムに関心を示している。

★　★　★

●世界選手権大会

1997年
男子は日本の熊本が決定しており（期日は未定）、女子はアメリカ合衆国と南アフリカが非公式ながら申し込みをしている。ジュニアは申し込み国はまだない。

# フリースロー
# 「ドーピング・ショック」

企画・広報委員　早川　文司

昨年10月の広島アジア大会でメダルを荒稼ぎした中国。そのメダリスト11人から筋肉増強剤の陽性反応が出た。そして世界重量挙げ選手権優勝者2人も失格した。以前から指摘されていた「組織的ドーピング」の黒いうわさが表面に出てきた感じだ。

これほどの大量ドーピング違反が発覚したのは、陸上男子100メートル優勝のベン・ジョンソンら10人を数えた1988年のソウル五輪以来のことだ。

また、大量ドーピングで思い起こすのは旧東ドイツ。五輪の水泳で米国を脅かすほど次々とメダルを獲得したが、ベルリンの壁崩壊後、組織ぐるみの薬物使用が発覚した。最近になって薬物の力を借りたのは、なんと324人にものぼるという秘密文書までが明るみに出た。国威発揚のためだったことは明かだ。

その旧東ドイツの水泳コーチが1980年代半ばに中国を指導したことがある。信じたくはないが、その時、変なことまで教えたというわささえあるほどだ（まさかと思いたいが…）。

さて、ドーピングは人間の身体にさまざまな副作用をもたらす。旧東ドイツの女子選手は、身体の異常や子供の奇形を告白している。また、男子の選手も身体が女性化したり、精神に異常をきたしたりというケースもあるという。非常に怖いものだし、選手の生命をむしばむことは間違いない。

さすが日本の選手には、こんな馬鹿なことをする人はいないと信じている。薬物に手を借りてまでメダルを取ってもなんにもならない。その結果がスポーツ大国になっても無意味である。むしろ汚れたメダルは必要ない。スポーツマン・シップにのっとって正々堂々と戦った上での勝利こそが、真の勝者であるはずだ。今回の事態によってアジアのスポーツ王国にのし上がった中国の国際的信用の失墜は悲しい。メダル取りはやはりクリーンにいきたい。

# 各地の大会結果

## 東北

### 第2回東日本小学生大会

(日時不明／東根市)

◎男子

▼予選リーグ

A　埴生小ハンド26－10本宮ハンドスポ少　東根ハンドスポ少29－4本宮ハンドスポ少　東根ハンドスポ少19－12埴生小ハンド

(順位)①東根ハンドスポ少②埴生小学校ハンド③本宮ハンドスポ少

B　リトルハンド13－8スポ少神町ハンド　上庄児童クラブ19－5スポ少神町ハンド　上庄児童クラブ13－4リトルハンド

(順位)①上庄児童クラブ②リトルハンド③スポ少神町ハンド

C　窪スポ少ハンド20－8尾花沢スポ少

(順位)①窪スポ少ハンド②尾花沢スポ少＊スポ少守谷クラブ(棄権)

▼順位決定リーグ

埴生小学校　21－9リトルハンド
尾花沢スポ少15－14　埴生小学校
尾花沢スポ少12－7リトルハンド

(順位)④尾花沢スポ少⑤埴生小学校⑥リトルハンド

▼決勝リーグ

上庄児童ク　14－8　東根スポ少
窪スポ少　17－10　東根スポ少
窪スポ少　15－5　上庄児童ク

(順位)①窪スポ少②上庄児童クラブ③東根スポ少

◎女子

▼予選リーグ

A　仏生寺スポ少20－8リトルハンド　仏生寺スポ少20－3東根ハンドスポ少　東根ハンドスポ少18－10リトルハンド

(順位)①仏生寺スポ少②東根ハンドスポ少③リトルハンド

B　スポ少神町ハンド4－4埴生小学校ハンド　スポ少神町ハンド14－5尾花沢スポ少　埴生小学校ハンド4－4スポ少神町ハンド

(順位)①スポ少神町ハンド②埴生小学校ハンド③尾花沢スポ少

(1・2位は得失点差による)

▼準決勝

仏生寺スポ少13－5　埴生小学校
スポ少神町　10－7　東根スポ少

▼3位決定戦

東根スポ少　7－5　埴生小学校

▼決勝

仏生寺スポ少18－4　スポ少神町

## 北信越

### 長野県高校新人大会

(11月5、6日／更埴市民体育館他)

◎男子

▼1回戦

更級農業高　27－24　美須々高校
坂城高　31－15　臼田高
田川高　31－8　千曲高
屋代高　34－12　野沢南高校
野沢北高校　21－19　清陵高
松本一高校　21－5　富士見高校
小諸高　22－10　蟻ケ崎高校

▼準々決勝

上田高　39－13　更級農業高
田川高　22－16　坂城高
野沢北高校　30－28　屋代高
小諸高　27－9　松本一高校

▼準決勝

上田高　16－12　田川高
小諸高　22－16　野沢北高校

▼決勝

上田高　22－13　小諸高

◎女子

▼1回戦

長野南高校　19－8　北佐久農業
臼田高　19－16　塩尻高
蟻ケ崎高校　31－4　小諸高
美須々高校　16－9　野沢南高校
坂城高　23－4　小諸商業高
松本一高校　25－14　更級農業高

▼準々決勝

屋代高　43－10　長野南高校
田川高　34－10　松本一高校
坂城高　16－10　美須々高校
蟻ケ崎高校　39－7　臼田高

▼準決勝

屋代高　25－16　蟻ケ崎高校
田川高　20－9　坂城高

▼決勝

屋代高　23－20　田川高

## 近畿

### 大阪府高校新人大会

(11月23日～12月18日／大浜高校)

◎男子

▼1回戦

大商大堺　36－12　阪南
茨木　18－13　大阪学院
刀根川　13－10　芥川
清風　14－9　堺東

▼2回戦

桃山学院　25－8　西野田工業
大商大堺　26－11　春日丘
此花学院　35－6　茨木
都島工業　24－9　大体大浪商
初芝　18－9　刀根山
大商学園　21－15　清風
上宮　29－5　西寝屋川

▼3回戦

桃山学院　26－15　大商大堺
此花学院　19－9　都島工業
初芝　15－14　北陽
上宮　22－15　大商学園

▼準決勝

桃山学院　19－16　此花学院
初芝　15－11　上宮

▼3位決定戦

此花学院 22—10 上宮
▼決勝
桃山学院 29—12 初芝
◎女子
▼1回戦
阪南 15—11 南寝屋川
西寝屋川 22—4 信愛女子
桜塚 19—11 三国丘
東淀川 21—9 初芝
▼2回戦
宣真 27—4 刀根川
阪南 25—3 東百舌鳥
桜宮 21—6 西寝屋川
福島女子 32—3 岸和田
大谷 36—2 天王寺
春日丘 16—11 桜塚
東淀川 13—10 城南学園
四天王寺 37—3 枚方
▼3回戦
宣真 31—6 阪南
福島女子 9—5 桜宮
大谷 31—7 春日丘
四天王寺 18—7 東淀川
▼準決勝
宣真 14—13 福島女子
四天王寺 21—15 大谷
▼3位決定戦
福島女子 27—8 大谷
▼決勝
宣真 16—15 四天王寺

## 和歌山県秋季選手権大会

（10月30日、11月3日／那賀高校他）

■高校・一般の部
◎男子
▼1回戦
粉河高 23—21 和高専
粉河ク 19—17 和工高B
紀北農芸高 19—11 紀伊ク
近附高 22—14 海南高
和歌山大B 26—3 桐蔭高B
白馬ク 29—10 和西高
那賀高 26—12 桐蔭高A
JOKER 21—18 和工高A
和歌山大A 37—6 笠田高
箕島高 19—13 市和商業高
貴志川高 12—0 桐蔭ク
▼2回戦
住友金属 24—7 粉河高
粉河ク 16—10 紀北農芸高
和歌山大B 32—12 近附高
耐久高 16—15 白馬ク
那賀高 23—14 有田ク
県和商高 20—15 JOKER
和歌山大A 30—17 箕島高
県和商ク 23—16 貴志川高
▼3回戦
住友金属 30—11 粉河ク
和歌山大B 23—10 耐久高
県和商高 17—15 那賀高
県和商ク 23—16 和歌山大A
▼準決勝
住友金属 22—17 和歌山大B
県和商高 23—18 県和商ク
▼決勝
県和商高 24—16 住友金属
◎女子
▼1回戦
初芝橋本高A 30—2 県和商高
和歌山大B 16—6 海南高
那賀高 19—13 箕島高
那賀ク 29—0 粉河高
貴志川高 11—5 笠田高
和歌山大A 21—1 御坊商工高
初芝橋本高B 41—2 桐蔭高
▼2回戦
初芝橋本高A 19—10 shellク
那賀高 18—6 和歌山大B
那賀ク 20—8 貴志川高
初芝橋本高B 25—12 和歌山大A
▼準決勝
初芝橋本高A 27—10 那賀高
初芝橋本高B 18—10 那賀ク
▼決勝
初芝橋本高B 18—16 初芝橋本高A

■中学校の部
◎男子
▼1回戦
那賀中 22—9 打田中
岩出二中 16—7 湯浅中
▼2回戦
金屋中 12—9 近附中
那賀中 19—10 有功中
貴志川中 24—10 岩出二中
紀伊中 16—5 岩出中
▼準決勝
那賀中 19—6 金屋中
紀伊中 14—9 貴志川中
▼決勝
紀伊中 14—8 那賀中
◎女子
▽Aグループ
▼1回戦
那賀中 16—7 粉河中
岩出中 15—6 打田中
▼決勝
那賀中 14—4 岩出中
▼敗者復活戦
粉河中 25—7 打田中
粉河中 15—11 岩出中
▽Bグループ
▼1回戦
桃山中 11—9 紀伊中
貴志川中 18—2 桃山中
貴志川中 24—0 紀伊中
▼準決勝
那賀中 14—10 桃山中
貴志川中 12—9 粉河中
▼準決勝
那賀中 14—10 桃山中
貴志川中 12—9 粉河中
▼決勝
那賀中 20—4 貴志川中

## 兵庫県新人大会

（11月12～23日／須磨東高校他）

◎男子
▼1回戦
明石北 22—2 須磨東
兵庫 18—10 高砂南
尼崎小田 17—9 北須磨
明石清水 16—7 鈴蘭台西
鈴蘭台 21—12 西宮南
宝塚西 22—6 宝塚北
神戸国際附 18—6 甲陽
長田 29—8 伊丹北
▼2回戦
明石 22—16 明石北
兵庫 20—15 神戸弘陵
尼崎小田 19—18 柏原
育英 24—13 明石清水
西宮東 21—10 神戸国際附
兵庫工 31—13 鈴蘭台
明石西 16延14 宝塚西

伊丹西 19－10 長田
▼準々決勝
明石 30－11 兵庫
育英 37－15 尼崎小田
兵庫工 16－10 西宮東
伊丹西 17－13 明石西
▼決勝リーグ
育英 22－18 明石
伊丹西 15－12 兵庫工
育英 21－16 兵庫工
明石 25－10 伊丹西
兵庫工 17－15 明石
育英 27－11 伊丹西
(順位)①育英②明石③兵庫工④伊丹西

◎女子
▼1回戦
鈴蘭台 23－4 赤塚山
明石清水 28－6 宝塚西
宝塚北 23－7 須磨東
明石南 21－6 兵庫工
伊丹西 20－16 高砂南
葺合 13－7 武庫川
市西宮 15－3 川西緑台
鈴蘭台西 17－3 川西北陵
▼2回戦
夙川学院 25－3 鈴蘭台
明石清水 21－11 明石城西
甲子園 27－7 宝塚北
神戸女商 25－8 明石南
明石 14－12 伊丹西
親和 13－12 葺合
明石北 16－7 市西宮
園田学園 22－9 鈴蘭台西
▼準々決勝
夙川学院 27－7 明石清水
甲子園 18－9 神戸女商
園田学園 16－10 明石北
明石 36－6 親和
▼決勝リーグ
夙川学院 20－8 甲子園
明石 23－3 園田学園
夙川学院 31－15 明石
甲子園 16－11 園田学園
夙川学院 22－3 園田学園
明石 23－14 甲子園
(順位)①夙川学院②明石③甲子園学院④園田学園

## 兵庫県中学校新人大会

(12月11日・1月8日／グリーンアリーナ神戸他)

◎男子
▼1回戦
大久保 22－9 小部
横尾 24－7 高砂
魚住東 30－12 飛松
丸山 25－12 浜の宮
▼準決勝
丸山 22－11 魚住東
浜の宮 23－14 筒井台
▼決勝
浜の宮 18－16 丸山

◎女子
▼1回戦
衣川 20－6 親和
横尾 12－5 魚住
魚住東 15－3 桜が丘
本山 21－3 高丘
▼準決勝
衣川 19－7 松陽
魚住東 15－14 本山
▼決勝
衣川 23－4 魚住東

## 兵庫県室内総合選手権大会

(12月23・1月8日／神戸グリーンアリーナ)

▼1回戦
西宮東クラブ 30－6 PF須磨東ク
荒井クラブ 22延18 兵庫工業高
兵庫県警ク 23－14 明石高
神戸製鋼 20－11 甲南大学
スワロー兵庫 29－9 東播クラブ
明石BG 20－13 伊丹西高校
神戸国際大 18－9 明石北クラブ
育英高校 25－9 高砂南クラブ
▼2回戦
西宮東クラブ 34－10 荒井クラブ
兵庫県警ク 20－12 神戸製鋼
スワロー兵庫 19－12 明石BG
神戸国際大 20－16 育英高校
▼準決勝
西宮東クラブ 27－13 兵庫県警ク
スワロー兵庫 18－15 神戸国際大
▼決勝
スワロー兵庫 19－13 西宮東クラブ

◎女子
▼1回戦
武庫川女大 11－9 明石高校
甲子園学院高 16－7 R風見鶏ク
夙川学院高校 14－11 神戸女子商
風見鶏クラブ 22－5 園田学院高
▼準決勝
風見鶏クラブ 16－13 夙川学院高校
武庫川女子大 22－7 甲子園学院高
▼決勝
武庫川女子大 16－15 風見鶏クラブ

# 中国

## 山口県学生選手権秋季大会

(11月27、12月4日／徳山大学記念館)

◎男子
▼予選リーグ
A
山口大学本部 27－11 宇部工業高専
徳山工業高専 28－11 宇部工業高専
山口大学本部 28－13 徳山工業高専
B
徳山大学 20－18 山口大学医学部
徳山大学 24－10 山口短期大学
山口大学医学部 32－5 山口短期大学
▼順位決定トーナメント
山口大医学部 13－12 山口大本部
徳山大学 22－21 徳山工高専
▼5・6位決定戦
宇部工高専 20－9 山口短期大
▼3・4位決定戦
山口大本部 35－20 徳山工高専
▼決勝
山口大医学部 20－14 徳山大学

※お願い　大会の記録用紙をお送りいただく時には、必ず会場名と開催日を明記して下さい。

| 5人以上のグループでご加入ください。 | 掛金（1人年額） | 傷害保険（保険金額）死亡・後遺障害 | 入院 | 通院 | 賠償責任保険（支払限度額） | 共済見舞金 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| ●スポーツ少年団、子ども会など中学生以下のグループ<br>●成人の文化活動、ボランティア活動のグループ | 400円 | 最高 2,000万円 | 1日につき 4,000円 | 1日につき 1,500円 | 対人賠償 1人 1億円 1事故 5億円 | 突然死および日射病、熱射病による死亡 120万円 |
| ●ママさんバレーなどの地域スポーツのグループ<br>●高校の運動部および大学・会社などのスポーツ同好会<br>●一定の資格のある指導者のグループ | 1,300円 | | | | | |
| ●老人クラブ団体<br>団体員が、おおむね60歳以上の人により構成された団体 | 600円 | 500万円 | 1,800円 | 1,000円 | 対物賠償 500万円 | |

注：ほかに学生連盟・実業団連盟に所属する団体の加入も扱っています。

■対象となる事故
● グループ活動中の事故　● 往復途上の事故

■保険期間
平成7年4月1日より翌年3月31日まで（申込受付は3月より）


（財）スポーツ安全協会
東京都渋谷区神南1-1-1 岸記念体育会館 TEL (03)3481-2431(代表)


加入申し込み、資料の請求、お問合わせ　スポーツ安全協会各都道府県支部（主として教育委員会保健体育課および体育協会）、もよりの東京海上火災保険㈱の営業店にご照会ください。

# 「幸福」が増えますように。

豊かさがもたらすもの。それはなによりも、ひとりひとりの「幸福」であるべきでしょう。心の幸福感があって初めて、豊かさは意味を持つのです。物質的・量的な価値観から、精神的・質的な価値観へ。私たち伊藤忠は、「豊かさを担う責任」という企業理念のもとにチャレンジを続け、きっとみなさんに本当の豊かさをお届けします。

豊かさを担う責任。

伊藤忠商事株式会社

(財)日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第三五〇号
昭和四十年六月七日 第三種郵便物認可
平成七年二月二十六日 印刷
平成七年三月一日 発行
東京都渋谷区神南一—一—一
電話 代表 三四八一—二三六一
振替 〇〇一二〇—七—一〇二九三
編集兼発行人 中澤重夫
定価三百五拾円